

第三百一十一條 法律ハ州ノ構制及州政ニ係リ州會ノ職任ヲ規定ス
○州益ノタメニ定タル王勅及條例ハ第二百二十九條ニ掲ル條則ヲ
除クノ外國王之ヲ准允スヘシ○州會ハ州内ノ輸出入及通運ニ妨
碍ヲキコトヲ看守ス

第三百十二條 州會ハ邑官ノ争訟ヲ勸解ス若シ之ヲ勸解スルコト能
ハスシテ其行政權抵觸ニ係ルキハ國王ノ決裁ヲ仰ク

第三百十三條 國王ハ法律若クハ國益ニ戾レル州會ノ布令ヲ停閣
シ又取消スコトヲ得○法律ハ此停閣若クハ取消ヲ行ヒシヨリ生
タル關係ヲ規定ス

第三百十四條 州會ハ國王及國會ニ對シ其州ノ土地人民ニ係ル利
益論辨保護スルコトヲ得

第三百十五條 法律ハ州會ニ屬スル權任ノ受用ヲ規定ス

第三百十六條 州會ハ法律ノ條規ニ循ヒ其會期間及其閉會ノ間庶
務ノ管理決行ニ屬スル事般ヲ掌トルデヒユタシテンベルマナント常設委員ヲ其議員中ニ選用
ス

第三百十七條 國王ハ州毎ニ王勅ノ執行及州會ヨリ發出スル布令
ノ監察ニ任スル理事官ヲ命ス○理事官ハ州會及常設委員ノ會議
ニ上席ス但常設委員ノ會議ニ於テハ決議ノ權ヲ有ス

第三百十八條 邑官ノ設置構制及權任ハ州會ニ問議シ且次ノ數條
ニ定メタル條則ヲ遵踐シテ法律之ヲ定ム

第三百十九條 邑ニハ各一邑會ヲ置テ其理治ニ長トス但邑會ノ議
員ハ定タル幾歲間及法律ニ定タル條規ニ準シ邑民之ヲ直選ス○
國王ハ邑會ノ議長ヲ任命シ及廢黜ス且邑會議員ノ外ニ該議長ヲ
撰用スルコトヲ得○邑ノ選舉人トナルニハ第七十六條ニ定タル分

限ヲ充備スヘシ但選舉人タルカキメニ納ルヘキ直税ノ額ハ同條ニ揭ケタル半數ニシテ足レリトス

第四百十條 邑會ハ邑政及邑益ノ事件ヲ規定ス第三百三十三條ハ邑會ニ於テ定タル此條例ニ準用スヘシ但邑會ハ此條例ヲ州會ニ通知ス

第四百十一條 邑領ノ賣買ニ管スル邑官即チ邑會ヲ指テ云フノ布令法律ニ

第四百十二條 邑稅ヲ制定變改若クハ廢止シタル邑官ノ布令ハ州會ニ通照ス州會ハ之ヲ國王ニ上奏シテ制可ヲ仰ク○法律ハ邑稅

ニ管スル總則ヲ定ム○邑稅ヲ課スルニ因リ各邑雙互ノ通運又輸出入ヲ妨碍スルヲ得ス

第四百十三條 法律ハ亦邑ノ歲計豫算表及決算表ニ係ル總則ヲ定

第四百十四條 邑官ハ國王國會及州會ニ對シ其邑ニ屬スル土地人民ノ利益ヲ論辨保護スルヲ得

第四百十二條 州會ハ其州内ノ水流、橋、堤、水理務及水理區ヲ監察シ

國王ノ准允ニヨリ水理區ノ構制ト條例トヲ變改シ及之ヲ新設スルヲ得但前二條ニ揭ル條則ハ此限ニ在ラス○是故ニ水理區ノ長官ハ州會ニ其意見ヲ起議スルヲ得

第四百十三條 州會ハ其州内ニ於テ荒蕪開墾、堤防、建築、沼澤乾竭及泥炭坑、礦坑、採石坑ノ開堀ヲ監察ス然レ國王ハ官吏ヲ特設シテ此監察ノ任ヲ與フルヲ得

州ヲ分テ郡ト爲シ各郡ニ於テ議院一ヶ所アリテ施政及裁判事務ヲ兼勤スルナリ議長及裁判役二人ハ華族之ニ任シ其他ノ裁判役二人ハ農民之ニ任シ檢事一名之ニ屬ス○各州ニ於テ施政ノ評議ヲ爲ス者ハ已ニ前文ニ述ヘタル華族議院及州ノ議會郡ノ議會ナリ州ノ議會ハ郡ノ議會ヨリ選任シタル名代ヲ以テ編制シ郡ノ議會ハ左ノ三種ノ人民ノ選舉人之ヲ任ス

第一 地主華族タルト否トヲ問ハス

第二 市街ニ住居スル者

第三 村邑ニ住居スル者

凡選舉人トナルニハ二十五歳已上ヲラサルヲ得ス且法律ニ定タル條々ニ適セサルヲ得ス此議會ノ議員ハ三年間任スル者ニシテ給料ヲ受ルコトナシ邑ノ議會ハ毎年一度二十日間集會シ郡ノ議會ハ毎年

一度十日間集會ス各華族ノ「マレシヤル」之ニ上席スルナリ其議會ノ職務ハ左ノ如シ

第一 其州ノ財産金錢歲入ヲ取扱フ事

第二 其州ニ屬スル道路或ハ家屋ヲ築造シ及修治スル事

第三 州民ノ安樂ニ要スル處分ヲ爲ス事

第四 救恤ノ處分救育所ノ支配及寺院ノ建築

第五 此州ニ於テ設タル「アツシユラヅス、ミユチユエル」會社人

互ニ相助ル爲メ設立ヲ取扱フ事

第六 該州ノ貿易工作ヲ勸奨スル事

第七 小學人民ノ健康及獄舎ニ管スル處分

第八 傳染病及害惡ノ獸類ヲ防クノ處分

第九 全國ノ租稅ノ中法律ニ定タル所ノ稅ヲ割賦シ又地方稅

ヲ承諾及決定シテ之ヲ割賦ス又其稅ヲ以テ州郡ノ費用ニ供スル事

第十 州院郡院集會セサル間ニ其事務ヲ取扱フ可キ委員ヲ任スル事但各州ノ委員ハ議長一名及二員ヨリ六員マテノ議員ヲ以テ編制シ三年間之ヲ任シ且俸給ヲ授ク○郡ノ委員ハ二員或ハ三員ノ議員ヲ以テ編制ス委員議長ノ撰任ハ内務卿ノ確定ヲ受ク

市街ノ施政 各市街ニ於テ邑長一名副邑長數名及議院一ヶ所ヲ以テ編制シタル邑官アリ邑官ハ左ノ者ヲ以テ編制シタル議會之ヲ任ス

第一 邑稅ヲ納ムル所ノ不動産ノ主

第二 商社或ハ工作所ノ主及支配人

第三 此市街ニ二年間已上住居シ且邑稅ヲ納ムル者

邑官ノ職務ハ邑内事務ノ外取締ノ保存安寧及健康ノ處分港津商市相場市銀行教育所病院貧院ニ付テノ規則ヲ設立スルコト公學貿易工作ヲ勸勵スルコトヲ包含ス○邑官ノ内ヨリ選舉シタル六員ハ警察貿易裁判所ヲ編制ス

村邑ノ施政 村邑ハ土地ヲ耕作スル農夫ノ組合ナリ華族及ヒ人民ノ大田地ハ村邑ニ屬セス州政ニ屬スルナリ又市街ニモ各別ノ施政ノ方法ヲ用フルナリ○村邑ニ於テ家主集リテ議會ヲ爲ス此邑會ハ邑長學校長收納官森林保存役及其他ノ役人ヲ任シ邑ノ歲出入豫算表ヲ作シ邑ノ費用ニ供ス可キ爲メ要スル所ノ邑稅ヲ定メ且全國ノ租稅ヲ邑民ニ賦課スルナリ○邑ノ土地邑民ノ共有物ナレハ露地ニ於テ大概邑民ハ此議會ハ邑地ヲ分テ之ヲ各家ニ

配當ス若シ邑民各別ニ土地ヲ所有スル時ハ其家屋ナキ土地ノミ
 ナ配當スルナリ尙此議會ハ農夫ニ轉邑ノ免許ヲ授ケ又邑内ニ住
 居セントスル他邑ノ家主ニ其免許ヲ授ケ或ハ拒ナリ幼者ニ後見
 人ヲ付ケ又家内ニ於テ財産ヲ分配スルコトヲ許ス此議會ハ警察裁
 判所トシテ犯罪ヲ裁判ス其言渡ヲ得可キノ刑ハ罰金ヨリ邑ヲ放
 逐スルノ刑ニ至ルマテトス○邑ノ上ハ「ボロスト」乃チ日本ノ大區
 ニ似タル者アリ區長一名副區長二三名及議院ニケ所之ヲ管理ス
 ルナリ此議院ノ中一ケ所ハ邑ノ名代十戶毎ニ名代一人トスヲ以テ編制シ其
 他ノ議院ハ區長ヲ輔佐スル爲メ設タル者ニシテ區内ノ諸邑長及
 收納官ヲ以テ編制ス

十四 國費

○佛蘭西 一千七百九十一年

第九十八條 租稅ハ年々民選議院評議ノ上定ルモノニシテ翌年
 會席ノ終日マテ自然之ヲ繼續スヘシ

第九十九條 國債ノ仕拂及國王ノ俸金ノ拂方ニ要スル金錢ハ孰
 レノ口實アルモ民選議院之ヲ承諾セサルヲ得ス又孰レノ時ト雖
 モ其仕拂ヲ一時差停ムヘカラス○「カトリック」宗ノ僧ノ給金ハ國
 民ヨリ選任シ或ハ憲法會ヨリ委任シタル僧徒ヲ論セス之ヲ國債
 中ニ加入スヘシ○孰レノ場合ニテモ民選議院ハ一人ノ負債ヲ全
 國民ニ負ハスヘカラス

第二百條 諸省ノ諸費ノ詳細ノ勘定書ハ諸卿或ハ「ナルドナル」セ
 「ネラル」拂ヘキ証書ヲノ証文及花押ヲ受シ後會席ノ初ニ印刷シ布
 記判スル役人

告スヘン ○諸税及總テ歳入ノ收納表モ前文ト同様ナルヘシ
 右出入金ノ証書ハ其種類ヨリテ區別スヘシ且各郡ニ於テ各年
 ノ歳出入ノ金高ヲ詳細ニ顯スヘシ ○各州ニ限ル處ノ雜費ノ中裁
 判所施政局及他ノ公ノ建造所ニ管スル雜費モ同様ニ布告スヘシ
 第二百一條 州官郡官ハ民選議院ニ於テ定タル金高及期限ノ外民
 選議院ノ免許ヲ受サレハ孰レノ租税取立或ハ孰レノ租税ノ配賦
 ヲナスヘカラス且一州人民ノ負フヘキ所ノ借金ハ之ヲ評議シ或
 ハ許スヘカラス
 第二百二條 行政官ハ諸税ノ收納ト拂方トヲ注意シ且右ニ付要ス
 ル命令ヲ發ス

○佛蘭西 一千七百九十三年

第一百一條 國費ノ供用ニ參加スルノタメ爲スヘキニヨリテ孰レ
 ノ國民モ之ヲ免ルヘカラス
 第一百二條 國帑寮ハ總テ共和國ノ出入金錢ヲ合一スル所ナリ
 第一百三條 行政院ヨリ委任シタル勘定役ハ之ヲ掌管ス
 第一百四條 民選議院ヨリ特任シタル委員ハ國帑寮ノ勘定役人ヲ檢
 査スヘシ但此委員ハ民選議員中ニ撰擧スヘカラス且會計上ニ於
 テ故造アルニ於テハ右委員之ヲ告發セサレハ其責ヲ任スヘシ
 第一百五條 國帑寮ノ官員ノ會計書及其他都テ官金ヲ掌管スル役人
 ノ會計書ハ行政院ヨリ特任シタル検査委員ニ年々之ヲ送達スヘ
 シ且其委員夫ニ就テ責ニ任スヘシ
 第一百六條 検査委員且民選議院ヨリ民選議員ノ外ニ撰擧シタル他
 ノ委員ハ前條ノ検査委員ヲ監守スヘシ右監守委員ハ會計書ニ於

千
テ過度或ハ違算アリテ之ヲ告發セサレハ其責ニ任スヘシ○民選
議院ハ國ノ年計ノ決算ヲ爲ス

○佛蘭西 一千七百
九十五年

第三百二條 租稅ハ民選議院毎年評議ノ上之ヲ決定ス民選議院ノ
之ヲ設立スルヲ得ヘシ且租稅ハ更ニ再決セサレハ一年ヨリ長
ク續クヘカラス

第三百三條 民選議院ニ於テハ都テ緊要ト思フ所ノ租稅ヲ設立ス
ルヲ得ヘシト雖モ毎年必ス地稅及人稅ヲ設立スヘシ

第三百四條 孰レノ人モ斯ノ如キ憲法ノ第十二及第十三條ニ記シ
タル場合ニアラス又直稅ノ割付書ニ記名セサルキハ己ノ邑政官
ニ出テ農業三日分ノ雇賃ニ均キ以稅丈ケ右直稅割付書ニ自ラ記

名ナルヲ得ヘシ

第三百五條 前條ニ從テ自名ヲ直稅ノ名簿ニ記スルノ權ハ六月十
九日ヨリ七月十九日マテノミ之ヲ行フヲ得ヘシ

第三百六條 各類ノ租稅ハ各人ノ能力ニ應ジ都テ稅ヲ納ムヘキ國
民ノ間ニ配當スヘシ

第三百七條 督理官ハ租稅ノ收納ト仕拂トヲ注意シ且夫レニ付キ
要スル諸命令ヲ發スルヲナリ

第三百八條 諸費委細ノ勘定書ヲ各卿ヨリ實正シ且花押ヲ受ケ
後各年ノ初ニ出板シテ布告スヘシ○諸稅及總テ國ノ歲入ノ請取
表モ前文ト同様ナルヘシ

第三百九條 右出入金ノ表ハ其類ニヨリテ區別シ且政府ノ各地政
官ヨリ毎年爲セシ雜費及請取リ入金ヲ委細ニ顯スヘシ

第三百十條 各州限リノ雜費ノ内裁判所州郡邑ノ施政官學術ノ進歩及都テ公然工業及建造所ニ管スル雜費モ同様ニ布告スヘシ

第三百十一條 各州政官及邑政官ハ民選議院ヨリ定タル金高ノ外孰レノ税ノ配賦ヲ爲ス能ハス又民選議院ノ免許ヲ受ケスシテ州或ハ區或ハ邑ノ人民ヨリ擔當スヘキ借金ヲ商議シ或ハ評スヘカラス

第三百十二條 貨幣ノ諸類ノ鑄造及發行ヲ定メ且其位價ト重量及模様ヲ決スルコトハ民選議院ノミ之ヲ定ヘシ

第三百十三條 督理官ハ貨幣ノ鑄造ヲ注意シ及直ニ検査スヘキ官員ヲ委任ス

第三百十四條 民選議院ハ佛蘭西國ノ租稅ヲ定メ且屬國ト本國トノ貿易ノ規則ヲ定立スルコトナリ

第三百十五條 國幣寮ノ委員五人アルヘシ右ハ五百員議院ヨリ差出シタル三通ノ人名表ニヨリ老人議院之ヲ撰舉スルコトナリ

第三百十六條 右委員ノ在職年期ハ五年ニ定マルコトナリシカ毎年其五人ノ内一人ヲ改選スヘシ尤退職ノ者ヲ直ニ再任シ及何度ニテモ復任スルヲ得ヘシ

第三百十七條 國幣ノ委員ハ國ノ金錢ノ收納ヲ検査シ民選議院ヨリ承諾セシ雜費ノ爲メ金錢ヲ遞送スヘキコト及之ヲ拂フヘキコトヲ命シ又各州ノ直稅收納官ト政府特權ノ製造所ノ支配人及各州ニ在勤スルヲ得ヘキ拂ヒ役ノ出入勘定日記ヲ開キ用ユヘシ且右收納官ト拂ヒ役ト支配官ト及州邑政官ト相當ノ往復ヲ爲スヲ以テ精確ニ金錢ヲ收納セシムルコトヲ擔當スルコトナリ

第三百十八條 國幣ノ委員左ノ決定ニ因ラスニテ金ヲ拂ヒ渡サシ

ムルキハ官吏公罪ヲ犯スナリ

第一 民選議院ヨリ發シタル布令且其布令ニ記シタル金高

第二 「シレントワール」官管理ノ決定

第三 其雜費ヲ拂フヘキナ命スル卿ノ花押

第三百十九條 金ヲ拂フヘキ手形ニ就テ如シ其手形ニ其雜費類ニ
管スル卿ノ印ヲ捺サスルテ或ハ其拂フナ承諾スル爲メ民選議
院ヨリ發シタル布令ノ月日及「シレントワール」ノ決定ノ月日ヲ記
セスルテ國幣ノ委員其手形ヲ承諾スルキハ官吏公罪ヲ犯セシ
トス

第三百二十條 各州ノ直稅收納官政府特權製造所ノ支配役ト各州
ノ拂ヒ役トハ各國幣ノ本局ヘ己ノ勘定書ヲ差出スヘシ國幣ノ本
局ニ於テ之ヲ檢査シ且其決算ヲナスヘシ

第三百二十一條 國幣委員ノ外民選議院ヨリ右同時ニ同様ノ法式
ト規則トヲ以テ選任シタル會計委員五人アルヘシ

第三百二十二條 國幣委員ハ共和國出入總勘定ニ各委細勘定書及
右ニ管スル証書ヲ添エシ後之ヲ會計委員ヘ差出ス會計委員之ヲ
檢査シ決算スヘシ

第三百二十三條 會計委員ハ其檢査所業中發覺セシ不正ト貪欲ノ
悪行及都テノ官員ヲ責任スヘキ註誤ヲ民選議院ヘ報告スヘシ又
會計上ニ付テ共和國ノ益トナルヘキ處置ヲ勸告スヘシ

第三百二十四條 會計委員ヨリ決算シタル勘定ノ略文ハ之ヲ出版
シ布告スヘシ

第三百二十五條 國幣及會計ノ委員ハ民選議院ノミ之ヲ停職シ或
ハ免職スルヲ得ヘシト雖モ民選議院集會セサル中ニ管理官ハ其

委員ノ内二人以下停職シ假ニ其代役ヲ任シ置ヘシ但其場合ニ於テ「シレクトワール」ハ民選議院ノ兩院ノ内初テ再會スヘキ議院ヘ其旨ヲ報告スヘシ

○佛蘭西 一千七百九十九年

第八十九條 國ノ會計委員ヲ設立シ共和國ノ出入金錢ノ計算證書ヲ之ニ檢査セシム可シ右委員ハ元老院ニテ全國連名書中ヨリ選任シタル七人ヲ以テ編制スル者ナリ

○佛蘭西 一千八百十四年

第七十條 國債ハ保証シタル者トス全体政府ヨリ國債主ニ對シテ爲シタル約束ハ違背ス可ラカル者ナリ

第四十七條 租稅ヲ設立スル爲ノ法律ノ議案ハ盡ク民選議院ニ届ケ出ツヘシ民選議院之ヲ承諾セシ上ニアラサレハ其議案ヲ上院ニ送ル可ラス

第四十八條 凡租稅ハ兩院ニ於テ之ヲ承諾シ國王之ヲ確定シタル後ニアラサレハ之ヲ定メ及收納ス可ラス

第四十九條 地稅ハ一年ノ爲ノミ之ヲ決議スヘシ不直稅ハ數年ノ爲メ決議スルヲ得ヘシ

○佛蘭西 一千八百十五年

第三十四條 地稅家租ヲ問ハス總テノ直稅ハ一年限ノミ之ヲ決議シ不直稅ハ數年ノダメ一度ニ決議スルヲ得可シ○下院解散スルニ於テハ新ナル下院集會スル迄ハ其前ノ集會中已ニ決議シタル

租税ヲ續テ徵ス可シ

第三十五條 金貨或ハ物品ヲ以テ納ム可キ直税ヲ論セス税ヲ徵スルヲ又孰レノ借用ヲ爲スヲ或ハ國債ノ簿冊ニ孰レノ借財ヲ記入スルヲ國家ノ孰レノ財産ヲ手離スルヲ又之ヲ引替ルヲ徵兵スルヲ國ノ領分ノ孰レノ地ヲ他ノ地ト取替ル等ハ法律ノ體裁ヲ用ヒスシテ之ヲ爲ス可ラス

第三十六條 凡租税ト金ノ借用ト徵兵等ヲ定シメントノ進言ハ下院ニ之ヲ差出ス可シ

第三十七條 左ノ者モ必ス先ツ下院ニ届ケ出ス可シ

第一 翌年ノ歳入豫算高并ニ各省ノ爲メ定額金ノ進言ヲ記シタル所ノ國ノ歳出入ノ總勘定書

第二 當年并ニ前年ノ勘定書

○佛蘭西 一千八百三十年

第四十條 凡租税ハ兩院ニ於テ之ヲ承諾シ國王之ヲ確定シタル後ニアラサレハ之ヲ定メ及收納ス可ラス

第四十一條 地稅ハ一年ノ爲ノミ之ヲ決議ス可シ不直税ハ數年ノ爲メ一度ニ之ヲ決議スルヲ得可シ

第六十一條 國債ハ保證シタル者トス全體政府ヨリ國債主ニ對シテ爲シタル所ノ約束ハ違背ス可ラサル者ナリ

○佛蘭西 一千八百五十二年

第九十條 全國ノ歳出入豫算表ニハ民選議院ノ歳出入金高ヲ直ニ元老院ノ歳出入金高ノ次ニ記スヘシ

千十
○千八百五十二年一月二十四日ノ憲法ヲ釋明シ且之ヲ更改スル千八百五十二年十二月二十五日ヨリ三十一日ニ至ル元老院決定書

第十二條 經費ノ見積書ハ政府ノ各宰相局ニ於テ其入用ノ額ヲ章條ニ分チ之ヲ議院ニ出ス可シ
其見積書ハ政府ノ各宰相局毎ニ議院ニ於テ之ヲ決議ス可シ
政府ノ各宰相局ノ爲メ許シタル經費ノ額ヲ章毎ニ分派スルハ參議院ニ於テ下シタル皇帝ノ勅書ヲ以テ定ム可シ
又同上ノ法式ニ從フタル別段ノ勅書ヲ以テ其經費見積書中ノ一章ヲ他ノ一章ト換ルヲ許ス可シ○此規則ハ千八百五十三年ノ見積書ニ之ヲ用フ可シ

○英吉利

第一第十四條 凡臨時助金ヲ要スル時ハ上條ニ掲ル三例ヲ除クノ外必ス之ヲ王國議院ニ於テ議定セン爲ニ先ツ大僧正僧正侯伯大名各通ノ勅書ヲ以テ召集シ自餘ノ小名大夫諸士ハソノチトイ其州官及縣官等ヲシテ一通ノ勅書ヲ以テ一統ニ召集セシムヘシ其期日并ニ集會所ハ少クモ四十日前ニ定メ知ラシムヘシ凡此勅書ニハ必ス其召集ノ所以ヲ申述スヘシ而シテ已ニ此ノ如ク召集シタル以上ハ其期日ニ至レハ假令議員未タ來集セサル者アリト雖モ其已ニ參集シタル議員ノミコテ先ツ議事ヲ始メ遲滯ナク其職務ヲ盡サシムヘシ○是即チ今日上下議院ノ階梯ナリ即今尙此例ヲ存シ上院ノ議員ハ王ヨリ各通ノ詔書ヲ以テ之ヲ召ス下院ノ議員ハ其州官ニ令シテ之ヲ召サシム

第十五條 將來助金ヲ其陪臣ヨリ妄リニ徵收スルノ權利ヲ其領主

ニ許與スヘカラス只其身ヲ贖フ時其嫡子元服ノ時及其長女婚姻ノ時等古例通りノ助金ヲ徵收スルハ此限ニアラス

第十六條 凡大夫諸士「ナイト」フリーテチン」ト各其領地ニ相當シタル國役ノ外決シテ之ヲ強要セラルヘカラス

第二十五條 凡州郡鄉村ハ悉ク古來ノ地租ヲ増加スヘカラス但帝ノ所領地「テミーンランド」ハ此限ニアラス

第五十五條 凡法外ノ貢金及罰金等已ニ命シタル者ハ悉ク之ヲ廢止スルカ或ハ下條ニ命スル所ノ二十五侯又其半數以上ト「カンタハレー」大僧正等ト共ニ之ヲ評定スヘシ若シ二十五侯ノ内爭論ニ加ハル者アル時ハ此時ノミ別段其者ヲ取除ケ別ニ其員數ヲ補ヒ二十五侯ト爲シ共ニ審判ヲ爲ヘシ

第二第五條 凡從來軍役國費等ノ助金及賦金ヲ獻納シタル者或ハ

其記錄卷ニ記載シタルヲ以テ後來宰相之ヲ認メテ先例ト爲シ以テ人民ヲ壓制センコトヲ恐ル、者アラン故ニ朕今更ニ准允ス凡助金賦金從前記錄卷ニ明載アリトイヘテ將來朕カ子孫ニ至ル迄是ヲ先例ト爲シ以テ助金賦金ヲ要取スルコト有ルヘカラス

第六條 朕汝大僧正僧正和尙一切ノ僧侶及侯伯全國一般ノ人民ニ左ノ條約ヲ准允シ永世子孫ニ至ル迄敢テ渝リアルコトナカルヘシ○凡自今國費ノ爲ニ助金賦金等ヲ要スル時ハ必ス全國利益ノ爲ニナルヲ認メ且先ツ全國人民ノ許可ヲ得ルニ非レハ決シテ之ヲ徵收スヘカラス但古來規定ノ助金賦金等ハ此限ニアラス

第七條 凡全國過半ノ人民羊毛ノ過稅ニ苦シム則羊毛一袋ニ付金四十「シリング」也人民已ニ此疾苦ヲ哀訴シ朕ニ歎願シテ之ヲ寬免センコトヲ請ヘリ故ニ朕今此稅ヲ悉皆免除シ且將來子孫萬世ニ至

ル迄全國人民ノ許諾ヲ得ルコ非レハ決シテ羊毛ノ稅ヲ收納スヘ
カラス○但古來ノ人民ヨリ准允スル所ノ羊毛及獸皮革ノ定稅ハ
此限ニ非ス後來證據ノ爲メ此條約ヲ勅令ニ作ル太子「エドワード」^{ブラント}龍
動ニ於テ之ヲ保證ス

卷三第一條 當巴里門ニ集會シタル貴族僧侶并ニ一般人民頓首再
拜シテ至尊君王ニ告白ス謹テ按スルニ昔先王「エドワード」一世ノ時
確定シタル「スタナム」^{スタナム}「デタレ」^{デタレ}「シチ」^{シチ}「ノン」^{ノン}「コン」^{コン}「セ」^セ「ド」^ド「ー」^ート云定
書ニ曰凡助金賦金ハ先ツ全國大僧正僧正侯伯大夫諸士人民ノ許
可ヲ得ルニ非サレハ君王ト雖ドモ之ヲ徵收スヘカラスト又先王
「エドワード」三世二十五年巴里門ニ於テ定タル書ニ曰凡皇帝ノ命
令ヲ以テ人民ヨリ負債ヲ募ルニ其負債ヲ皇帝ニ出金スルヲ好マ
サル者ニハ之ヲ強要スル能ハス如何トナレハ此ノ如キ強要ノ負

債ハ則チ此帝國ノ法律及人民自由ノ權利ニ相悖レハナリ且御冥
加金ト稱シ獻金ヲ強要スルコトモ已ニ法律ニ於テ制禁アリ抑陛下
ノ臣民ハ此自由ノ權利ヲ古ヘヨリ固有シ祖先ヨリ因襲シタルモ
ノ也故ニ巴里門一般ノ許可ニアラサレハ凡稅銀助金賦金等モ一
切之ヲ強要セラルヘカラサルハ已ニ顯然タリ○御冥加金トハ當
時已ニ國憲アリ妄リニ租稅ヲ増ス能ハス徵カニ嬖臣ヲ四方ニ派
出シ人民ヲ説キ或ハ之ヲ誘フ或ハ之ヲ威シ金銀ヲ出サシム之ヲ
御冥加金ト稱シ稅ト云ハス當時帝王權臣トイヘ直ニ法ヲ破ル
ヲ好マス只之ヲ避ル工夫ヲ爲ノミ因テ知ル法律ヲ愛スルノ精神
アルコトナ

○獨逸

第四條 帝國及帝國法律ノ管理ヲ受ヘキ諸件ハ左ノ如シ

第一 「フライツウギグカイト」獨逸聯邦ヲ自在ニ 轉移スルヲ謂フ 及人民ノ本籍

ハキヤリツ 權住居政權路券外國人取締ノ事ニ關スル種々ノ規則又此國

憲ノ第三條ニ於テ未ダ掲載セサル營業并ニ保險ノ事ニ關ス

ル種々ノ規則又外國ノ殖民及遷徙ノ事ニ關スル種々ノ規則

「パヒエール」ニ於テ本籍及住居ノ事ハ格別ナリトス

第二 輸出入税及貿易ニ關スル立法又帝國ノ爲ニ用ユ可キ賦

税ノ事

第三 度量衡及錢貨ニ關スル立法又有息紙幣公債無息紙幣通

紙幣ヲ發行スルニ付テノ規則

第四 「バンク」銀行ノ事ニ關スル規利

第三十三條 獨逸國ハ輸出入税及貿易ノ事ニ付テ一ノ疆界ヲ以テ

區畫シタル領地トス然レ地理ニ由リ右輸出入税ノ疆界内ニ列ス
可カラサル隔在ノ領分ハ之ヲ除ク○聯邦各國ニ於テ自由ニ用ヒ
ラル可キ諸物ハ輸出入税ヲ納スシテ聯邦ノ他國ニ輸入スルコトヲ
得可シ然レ輸入シタル諸物ト同物ニテ該國ノ國內税アル者ハ輸
入シタル諸物ニ付テモ亦同一ニ收税スルコトヲ得可シ

第三十四條 聯邦ノ市街「ブレトメン」及「ハンブルグ」并ニ之ニ屬スル

近傍ノ領地ハ右ニケ所ヨリ租稅會ニ加ハラントテ請求スル迄ハ

前條ニ掲載シタル全國ノ輸出入税ノ疆界外ニ在ル自由港ト看做

ス可シ

第三十五條 凡輸出入税及聯邦ノ領地内ニ於テ製造シタル食鹽烟

草火酒麥酒甜菜糖又他ノ國內ノ產物ヨリ製造シタル砂糖及糖蜜

ノ課税并ニ聯邦各國ニ收入ス可キ國內税ヲ互ニ相保護シテ密賣

ナカラシメ又獨逸全國ノ輸出入税ノ疆界ヲ守ル爲ニ緊要ナル處分ハ皆ナ帝國ノ立法ヲ以テ之ヲ定ム○「バビエール」及「ウイールテンベルク」及「バーデン」ノ三ヶ國ニ於テ國內ノ火酒税及麥酒税ハ其國ノ立法ヲ以テ之ヲ定ム然レハ聯邦各國ハ右諸物ニ付キ同一ナル收税法ヲ施行スルヲ要ス

第三十六條 輸出入税及國內税ヲ收メ及之ヲ管理スル事ハ聯邦各國ノ領地内ニ於テ昔時此事ヲナシタル國ニ於テハ將來亦之レヲ行フヲ得○皇帝ハ輸出入税及租税ニ關スル上院委員第八條第三項參看ノ評議ヲ受ケ聯邦各國ノ税關ノ官吏等及租税ノ監督官ノ側ニ置キタル帝國官吏等ニ由テ輸出入及租税ノ事ヲ總監ス○帝國一般ノ法律第三十五條參看ヲ充分ニ施行セサルコトニ付キ右帝國官吏等ノ爲ニタル告訴ハ上院ニテ之ヲ論決ス可シ

第三十七條 帝國一般ノ法律第三十五條參看ヲ施行スル爲ニ監要ナル行政規則及ヒ種々設立ノ事ヲ決定スル時如シ現在ノ規則或ハ設立

ヲ保タシムル爲ニハ議長ノ投言ニ由テ必ス之カ決定ヲナス可シ第五條參看

第三十八條 凡税關及帝國ノ立法ニ關スル此國憲ノ第三十五條ニ掲載シタル租税ノ收額ハ帝國ノ國庫ニ納ム可シ○税關及其他ノ租税ヨリ生スル收額ニ就キ除去ス可キ者ハ左ノ如シ

第一 法律ニ循ヒ一般行政ノ規則ニ由リ償還ス可キ租税及輕減ス可キ租税

第二 過テ課收シタルキ返還ス可キ租税

第三 租税ヲ課收シ及租税ヲ管理スルニ付テノ費額此第三項中ニ於テ區別ス可キ者ハ左ノ如シ

一 輸出入税ニ付テハ外國ニ對シ國境及其近傍ノ地方ニ於テ輸出入税ノ事ヲ保護シ又輸出入税ヲ課収スル爲ニ必要ナル費額

二 鹽税ヲ製鹽所ニ於テ之ヲ課收シ又此稅務ヲ管理スル爲ニ命セラレタル官吏等ノ俸給ヨリ生スル費額

三 甜菜糖及烟草税ニ付テハ上院ノ決定ニ循ヒ其稅ヲ管理ス可キ支償ノ爲ニ免除ス可キ償額

四 自餘ノ租税ニ付テハ總テ收額ノ十五分ヲ除去ス

第三十三條ニ掲載シタル輸出入税ノ疆界外ニ在ル隔在シタル種々ノ領分ハ每歲其國ニ相應シテ定タル金額ヲ帝國ノ國庫ニ納ム可シ〇「バビエール」「ウイリテンベルグ」及「バーデン」ノ三ヶ國ハ火酒及麥酒税ニ付キ帝國ノ國庫ニ納ム可キ金額及右隔在シタル領

分ヨリ納ム可キ其國相應ニ定タル金額ヲ納ムルコ及ハス

第三十九條 三ヶ月間課收セラレタル輸出入税及此國憲ノ第三十八條ニ據テ帝國ノ國庫ニ納ム可キ國內税ニ付各國稅關ノ上等官吏ニテ三ヶ月毎ニ製ス可キ三ヶ月摘要書及右輸出入税及國內税

ニ付キ上等官吏ノ歲末ニ於テ一歲ノ統計ヲ決算スルル租税ノ決

算書ハ各國ノ監督官ニテ豫メ之ヲ調査シ而シテ其一覽表ヲ編製

シ一切ノ稅額ヲ登記シ之ヲ上院ノ國計ニ關スル委員ニ送付スヘ

シ〇上院ノ國計ニ關スル委員ハ右一覽表ニ據テ三ヶ月毎ニ各國

ノ倉庫ヨリ帝國ノ國庫ニ納ム可キ金額ヲ假定シ之ヲ上院及各國

ニ報告シ而シテ己ノ意見書ヲ添ヘテ每歲右金額ニ付テ終リノ決

定書ヲ上院ニ提出シ上院ニ於テ更ニ右決定書ヲ議決ス

第四十條 此國憲ノ種々ノ規定ニ由テ改正セラレサル部分或ハ此

國憲ノ第七條及第七十八條ニ掲載セラル法式ニ由テ改正セラレ
サル者ニ付テ一千八百六十七年八月八日ノ租稅會ノ條約書ニ掲
載セラル種々ノ規定ハ其効チ有ス

第四十九條 郵便局及電信局ノ收額ハ帝國一般ノ爲ナリ其局ニ付
キテノ入費ハ帝國一般ノ入額ヨリ支給ス可キ者トス餘金ハ帝國
ノ大藏省ニ納ム可シ(原註)第十
二篇參看

第五十一條 第四十九條ニ從ヒ郵便ノ餘金チ帝國ノ大藏省ニ納ム
可キコトニ付キ聯盟各邦ニ於テ從前得タル所ノ餘金ハ大ナル差違
アルカ故ニ相當シタル平均チ得ル爲ニ此下ニ記載スル時間中ニ
用ユ可キ方法ハ左ノ如シ○聯盟各邦ニ於テ千八百六十一年ヨリ
千八百六十五年ニ至ル迄五ヶ年間得タル所ノ郵便ノ餘金ヨリシ
テ一年間平均ノ金額チ計算ス可シ其ノ平均ノ金額ヨリシテ聯盟

各邦共同シテ帝國大藏省ニ納ム可キ金額ニ付テ各邦ノ納ム可キ
割合チ定ヘシ○聯盟各邦ハ帝國ノ郵便局トナル時ヨリ八年間右
ノ如ク定タル割合ニ從テ其各邦ノ帝國大藏省ニ納ム可キ金額ハ
各邦ヨリ帝國大藏省ニ納ムル割合金ノ勘定ニ入ル可シ○八年ノ
時間ノ終リタル後ニ至リ右方法ハ用ヒス而シテ郵便一切ノ餘金
ハ第四十九條ニ記載セラル規定ニ從テ直ニ帝國大藏省ニ納ヘシ
○右ニ記載スル所ノ八年ノ時間中「ハンゼスタット」ノ三ヶ所ノ郵
便局ヨリ生スル餘金ノ割合金ノ半數ハ每歲豫メ皇帝ニ之チ納ム
可シ而シテ皇帝ハ之チ以テ「ハンゼスタット」ニ於テ獨逸帝國ノ規
則ニ合シタル郵便局ノ設立チ爲ヘシ

第六十九條 帝國ノ歲出入ハ毎年之チ見積リ而シテ之チ豫算表ニ
記載ス可シ此豫算表ハ其歲入チ費用スル年ノ前年ニ於テ此下ニ

記載スル所ノ規則ニ循ヒ議院ノ決議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第七十條 前年ノ殘金輸入税國內税及郵便局電信局ノ諸入額等ハ帝國ノ入費ヲ償フ爲メナリ帝國ノ諸入費ヲ償フ爲メ右金額ノ不足ナルキハ帝國ノ租税ノ收入セサル時間聯盟各邦ハ其人口ノ割合ニ因テ其不足分ヲ納ム可シライクスカンツレ大宰相ハ毎年豫算表ノ不足及聯盟各邦ノ納ム可キ部分ヲ布告ス可シ

第七十一條 帝國ノ諸入費ハ通例一年間ニ定ムルニ然ル格別ノ場合ニ於テ一年ヨリ長キ時間ニ定ムルヲ得可シ○第六十條ニ記載スル所ノ假規則ヲ用フル時間陸軍ノ入費ニ付テ明細ナル豫算表ヲ下院ニ進呈ス可シ

第七十二條 帝國ノ諸入額ヲ費用スルコトニ付キライクスカンツレルハ其責任ヲ解ク爲メ明細ナル豫算表ヲ毎年上院及下院ニ差出

ス可シ

第七十三條 非常ノ入費アル場合ニ於テハ兩院ノ決定ヲ以テ金額ヲ借り又帝國ノ名義ヲ以テ其負債ヲ保證スルヲ得可シ○ハビエールノ軍隊ノ入費ニ付第六十九條及第七十一條ノ規則ヲ用フ可キコトハ第十一篇ノ追加ニ記載シタル所ノ千八百七十年十一月二十三日ノ同盟條約ノ規定ニ由ル可シ又其軍隊ノ入費ニ付テ第七十二條ノ規則ヲ用フ可キコトハハビエールノ軍隊ノ爲メ必要ナル金額ヲハビエールニ出シタルコトヲ上院及下院ニ陳述ス可キコトニミ

○普魯西

第九十九條 國ノ費額及入額ハ必ス豫メ計算シテ國計表ニ記載ス

○ 院 來年ノ出入ヲ豫算ノ表冊トシテ
 定ムルハ 毎年ノ取ル者之ヲ豫算表トシテ
 建國法ノ大節目ナリ然レ此事普魯西ニ於テ實際忽略スル者多シ
 第百條 國計表ニ記載シ若クハ別法ニ定タルニ非ルヨリハ租稅及
 貢賦ヲ催スルヲ得ス
 第百一條 租稅ニ付テ特免アルヲナシ均賦○現存セル凡テノ特免
 ハ之ヲ廢スヘシ 貴族ノ特免ハ中
 第百二條 政府官吏及色吏ハ法ニ據ルニ非スシテ科費ヲ催スルヲ
 得ス 官吏正稅ノ外ニ因縁
 第百三條 法ニ據ルニ非レハ國債ヲ起スヲ得ス 國債ハ國ノ大事
 待○其它凡政府ノ保證ニ係ルモノ並ニ之ニ同 銀行及諸會社ノ
 受ケ償証及銀幣
 發行スルノ類

第百四條 實費國計表ヲ除ル時ハ兩院ノ後認テ要ス 事前許可已コ
 故ニ猶事後○出納ノ統計ハ統計院之ヲ檢勘結定ス 政府ノ歲計ヲ
 承認ヲ要ス 一歳ノ出納ヲ監視セシム佛國ノ制ニ倣ヘルナリ
 統計院ヲ設ク議院ニ付シ 監視セシム佛國ノ制ニ倣ヘルナリ
 檢勘シテ後ニ議院ニ付シ 監視セシム佛國ノ制ニ倣ヘルナリ
 毎年ノ統計全表ハ一歳ノ出納者統計院ヨリ國債消却ノ部ニ注
 加ヘ議院ニ付スヘシ○別法統計院ノ構制及權限ヲ定ム

第百九條 現行ノ租稅ハ舊ニ依テ收入スヘシ 新法ノ催稅ニ非ルヨ
 ス○ヒレテラシク氏ニ據ルニ此條第九條ト實ニ相盾ス故
 千八百五十年ヨリ千八百六十一年ニ至ル迄十二年間容テ發
 議チ八百五十年ヨリ千八百六十一年ニ至ル迄十二年間容テ發
 千八百六十二年ヨリ千八百六十六年ニ至ル迄四年間容テ發
 九ノ此由テ大ニ起ル是法ノ失ニ至ルテ其間千八百四十六
 年ノ歲計ヲ議スルニ至レリ 政府ノ專裁ヲ存セシナリ千八百
 ○ 澳地利

第二篇第二十二條 國債検査ノ方法ハ別法之ヲ定ム

第三篇第二條 左ニ擧グル條件ハ通國ノ事務ニ非サレハ宜ク通國事務ノ原旨ニ循テ處分スヘシ

第一 貿易事務就中税關法ニ關スル諸件

第二 專ハラ「アロジエクシオン、アンジエストリエル」人工ヨリ生スル産物ニ屬スル間税ノ法律

第三 貨幣條例及利子ノ制定

第四 帝國ノ兩部帝國議會ノ代理スル國ト匈牙利所屬ノ國ト云フニ通スル鐵道線ニ關スル規則

第五 内國防禦策ノ設定

第三條 帝國ノ兩部ハ皇帝ノ制可シタル帝國兩部議院ノ定時ノ判決ニヨリ定ヘシ金額ノ割合ヲ以テ通國事務ノ費用ヲ支ユ此一件

ニ付兩部議院ノ説相協ハサルキハ皇帝宜ク帝國兩部ニ於テ支ユヘキ費額ノ割合ヲ限定スヘシ然レ之ハ本年ニ限ル○帝國兩部ノ一ニ關スル課税ヲ決定スルノ權ハ特ニ各部ニ屬ス○然レ通國事務ノ費用ヲ補足スルタメ通國ノ公債ヲ作スヲ得ヘシ而シテ凡該公債ノ決定其享用并ニ還償ニ關スル事件ハ兩部ニ於テ合議スヘシ又帝國兩部ノ議員各別ニ通國ノ公債ヲ作スヘキヤ否ヲ論定ス

第四條 帝國ノ各部ニ於テ責任スヘキ現今國債ノ額ハ兩部相互ノ契約ニヨリテ之ヲ規定スヘシ

○米利堅

第一條第十三節一 議院左ノ權力ヲ持ツ可シ

第一 直稅緩稅等種々ノ租稅ヲ收メ國債ヲ拂ヒ外寇ニ備ヘ國
内ノ安寧ヲ全スル事但右緩稅等ハ合衆部中都テ一定ナルヘ

第二 合衆國ノ名ヲ以テ金銀ヲ借ル事

第十四節四 上ニ云フ人口確實ノ調ヲ得人民ノ多少ニ從ヒ之ヲ定
ルニ非レハ敢テ分頭稅ヲ收ム可ラス

第十四節五 何州ヨリ輸出スル物品ト雖モ直稅或ハ緩稅ヲ收ムル
コトナク各州ノ間公平ニ通商收稅ノ法ヲ立テ聊カ偏頗ナク又某州
ニ往キ某州ヨリ來ル船舶他州ニ於テ物品條目ヲ運上所ニ示シ或
ハ其運上所ニテ要スル手數ヲ爲シ出帆都合ヲ付ケ又運上ヲ拂フ
等ノコト莫カル可シ

第十四節六 規則ニ從テ配當スルニ非サレハ敢テ會計局ノ金銀ヲ

出ス可カラス其公金ノ出納精算ヲ詳書シ常ニ之ヲ公告スヘシ

第十五節二 議院ノ許准ヲ稟ケサレハ港内檢査ノ法ヲ行フニ必要
ナルモノヲ除クノ外出入ノ輸品ニ稅ヲ收ム可カラス而シテ各州
ニ於テ收ル出入稅銀悉ク之ヲ合衆國會計局ニ收メ其法例ハ乃チ
議院ニ於テ之ヲ統轄シ或ハ之ヲ改革ス可シ又議院ノ許ヲ稟ケス
何州ニテモトシテ積荷ノ輕重ニ從テ掛ケ平日兵卒ヲ養ヒ軍
艦ヲ備ヘ他州或ハ外國ト契約連合等ヲ爲メテ得ス又現ニ外寇ヲ
受ケ或ハ猶豫ス可カラサルノ危難ニ非レハ妄ニ戰爭ヲ作ス可カ
ラス

○白耳義

第一百十條 國稅ハ法章ニ由ルニ非レハ定ムルコトヲ得ス
必ズ議院ノ議ヲ經

ルヲ ○州税ハ州會ノ承諾ニ非レハ定ムルヲ得ス○法章州税邑
税ニ係テ其經驗ニ據リ已ムヲ得サル者ノ特例數條ヲ定ムヘシ
州會ノ承諾ヲ必
要シ得サル者

第百十一條 國税ハ毎年公議ス議院ニ於テ議決ス○國税ヲ定ルノ法章ハ其
力ヲ有スルノ一年ニ限ル一議數年ニ涉但一案再用スル者ハ例ニ
アラス前年ノ法章更ニ新議ヲ經テ後年ニ適用スルヲ云

第百十二條 租税ニ係テ特免アルヲ得ス○租税ノ免除及減分ハ
法章ニ由ルニ非レハ設ルヲ得ス特免ハ中古貴族税ナキノ類免
除減分ハ老廢孤貧ニ施フノ類

第百十三條 法章明ニ定タル特例ヲ除クノ外國州邑ノ正税ニ非ス
シテ國民ヨリ一ノ課賦ヲ責ルヲ得ス○現ニ行レタル防海堤税

河渠税普通法章ニ從フ者ヲ除クノ外更ニ新法ヲ加フルヲ得ス
第百十四條 國庫ヨリ支出スヘキ養料老退官員養料
家眷養料ノ類賞賜ハ法章ニ據

ルニ非レハ給與スルヲ得ス

第百十五條 毎年兩院ハ統計前年ノ法章ヲ決シ後統計及
豫算來歲ノヲ評定ス○政府一切ノ出納ハ必ス豫算表及統計表ニ

載スヘシ出納ノ
公布

第百十六條 統計院ノ官員ハ代議士院之ヲ撰任シ法章定ル所ノ任
期ヲ以テ代任ス一任
六年○統計院ハ政部全局ノ出納及國庫ヨリ支出

スル一切ノ會計ヲ檢查清算スルニ任ス○豫算表ノ支費ニ於テ一
項ノ過費アルヲナク實費定額
又一ノ那移アルヲ無キヲヲ監ス○

政府各部ノ統計ヲ決シ就テ一切ノ憑据一切ノ文票ヲ拾聚スルニ
任ス○國計全表ハ毎年統計ヲ公統計院
布スルノ書統計院注明ヲ加ヘ兩院ニ付シ議
ヲ取ル○統計院ノ構制ハ法章之ヲ定ム

第百十七條 僧官ノ俸給養料ハ政府ヨリ支出シ其定額ハ毎年豫算

表ニ載ス 借門私産ノ
弊ヲ除ク

○瑞典

第五十八款 尋常ノ集會毎ニ國王ハ必ス國中會計ノ摸樣ヲ書面ニ認メ一切ノ出納公債等ヲ明記シ議院ニ差出スヘシ若シ外國ト條約ヲ取結ヒタルカ爲ニ一定ノ金額ヲ仕拂フヘキ時ハ之ヲ前文ノ手續同様ニ取計フ可シ

第五十九款 若シ國用多端ニシテ定額ノ歲入ヲ以テ之ヲ支ユルニ足ラサルキハ國王ハ國中會計ノ摸樣ト其緩急ノ次第トヲ議院ニ差出ス同時ニ租稅ヲ賦シテ之ヲ補足スヘキ方法ヲ報知ス可シ

第六十款 租稅トハ海關稅間稅郵信稅家釀火酒印稅及集會毎ニ課定スル處ノ諸人頭稅ヲ含ム者ト知ル可シ穀物ノ輸出入稅ヲ除ク

ノ外總テ國王ニ拂フヘキ諸稅ハ如何ナル名目品種ニ拘ラス議院ノ承諾ヲ俟タスシテ之ヲ增加スルヲ得可シ○國王ハ其一身或ハ一國或ハ格段ノ人民ハ社會ノ利益ヲ謀ルカ爲ニ國ノ歲入ヲ他ニ假貸ス可ラス又專賣ノ株式ヲ設ヘカラス

第六十一款 前款ニ載ル所ノ名目ヲ以テ議院ニテ發言スル處ノ諸稅ハ其歲末迄之ヲ收納シ而シテ議員ノ集會ニ於テ再ヒ之ヲ議定ス可シ

第六十二款 議院ニ於テ國費切迫セシニ相違ナキ旨ヲ承認スルキハ右經費相當ノ需用ヲ募リ并ニ其高キ議定スルノ議論ニ及フ可シ但收納ノ上ハ之ヲ諸用ニ充タシ且之ヲ歲計簿ニ記スヘシ

第六十三款 右ノ外非常用意トシテ公債局ニ於テ充分ナル儲金ヲ募リ之ヲ甲乙ノ二口ニ仕分ケ置クヘシ甲ノ儲金ハ國王內閣大臣

コ諮詢シ其意見ヲ聽キタル上コテ之ヲ支出セサレハ止ム可ラサ
ル緊急ノ事出來スルキニ之ヲ取テ國ノ防禦其他重大ノ要費ニ供
スルコトヲ得ヘシ乙ノ儲金ハ戰爭ノ時國王内閣大臣一休ニ商議シ
議院ヲ召集シ其上ニテ使用ス可シ○此儲金ハ議院ニテ封印ヲ付
シ置キ而シテ議院集會ノ旨ヲ都府ノ禮拜堂ニテ公告スルノ后ニ
アラサレハ公債局ノ委官ト雖モ開クコトヲ許サス

第六十四款 國王平常ノ財用并歲入ハ前款ノ趣ニ基キ議院ニ於テ
募收シタル諸金額即チ非常ノ國用ト稱スル者ト俱ニ國王之ヲ仕
拂フテ要用ヲ辨ス可シ但之ヲ仕拂フニハ議院ノ承認ヲ得テ且濫
費ナキヲ要ス

第六十五款 右收納ハ前款ニ掲タル用途ノ外ニ仕拂フ可ラス若シ
之ヲ仕拂フ時ニ内閣大臣其草按ニ意見ヲ記サス又之ヲ仕拂フヘ

キ議院ノ差圖アリシコトヲ言ハサル者ハ乃チ其責ニ任シテ濫用ノ
罪ヲ免ル可ラス

第六十六款 公債局ハ議院ノ管轄ニ屬シテ諸務皆其指令ヲ以テ施
行ス可シ議院ハ此局ヲ管轄スルニ付公債ノ仕拂ヲ保証シ且審カ
ニ會計ノ模様ヲ検査シ時宜ニ依リテハ別段ニ收納ヲ募リテ公債
仕拂ノ手段ト爲シテ之カ元利ヲ償ヒ以テ國信ヲ維持シテ墜サル
可シ

第六十七款 公債局ニ勤仕スル處ノ國王ノ委官ハ議院ノ委官ノ集
會スル時ニ其望所アルニ非サレハ商議ノ席ニ列ス可ラス

第六十八款 公債ノ用途ニ屬シ又之ニ充タスヘキ金額ハ何等ノ時
宜ニ至リ何等ノ名義アリト雖モ議院ニ於テ決定シタル目的ノ外
ニ使用ス可ラス○故ニ此金額ニ觸ル、處ノ命令ハ總テ無効ナリ

トス

第六十九款 會計課ヨリ國費ヲ辦理スル方法并ニ之ニ相當シタル
 租稅徵收方ノ建白ヲ議院ニ差立ス時ハ其公債局ノ費用ニ屬シ或
 ハ此局ヲ處置スル根本タルニ拘ラス總テ名代人撰擧ノ法律中ニ
 在ル手續ニ照シテ取扱フ可シ○議院ノ兩局各自ノ意見ヲ執テ一
 和シ難キ時ハ各局ニ於テ發言ノ多小ヲ計算シ其多數ノ方ヲ以テ
 議院ノ決議ト看做スヘシ

第七十款 若シ國立銀行ノ管轄入費等ノ議論ニ就テ兩局ノ意見ニ
 不同アルキハ又前款ノ規則ニ從ヒ兩局各自ニ發言ノ多少ヲ計算
 ス可シ

第七十一款 租稅ノ基本并ニ之ヲ使用スル方法并ニ租稅仕拂ノ分
 配ニ就テ兩局ニ異見アルキモ亦同様ノ手續ヲ以テ決定スヘシ

第七十三款 向後新規ノ租稅生兵ノ召募并ニ貨財ノ需索等ハ議院
 ニ於テ承知及満足シ而シテ前款ノ手續ニ照スニテサレハ決シテ
 之ヲ命令シ徵收スルヲ勿ル可シ

第七十四款 假令兵端開ケルヲアルモ其地方ハ行軍中其要需ヲ扶
 持スルニ過キス國王ハ決シテ要需ノ外ヲ徵求ス可ラス但其行軍
 スル他ノ地方ニ於テ之ヲ扶持シ能ハサルキハ格別ナリトス○然
 レ右要需ヲ差出シタル者ハ他日半價以上ヲ以テ政府ヨリ償却ス
 可シ右要需ハ其地方ニ屯營シ又戰時ニ行軍スル處ノ軍兵ノ爲ニ
 徵求スルヲ許サス斯ノ如キハ其爲ニ設立シタル官庫ヨリ軍兵
 ノ糧食ヲ支給スヘシ

第七十五款 毎年ノ市價ハ議院ニテ撰擧シタル委官其特命ヲ奉
 テ定ヘシ○此委官ニテ決定スル處ノ者ハ別段ノ請求ニ依テ其体

裁ヲ立テ改正ヲ加ルコアラサレハ之ヲ規則ト看做スヲ要ス

第七十六款 國王ハ議院ノ允准ヲ得ルコアラサレハ王國內外ニ於テ新債ヲ募ル可ラス又之ヲ國債ト爲スヘカラス

第七十九款 議院ノ允准ヲ經ルニ非レハ諸貨幣ノ品位ヲ増減シ改造スルコトヲ許サス但此規則アルカ爲ニ國王ノ貨幣ヲ鑄ルノ權ヲ削ルコアラス

第九十款 若シ希望スル處ニ反シテ議院其散會ノ時ニ至テハ尙國費ヲ預備セス或ハ租稅ノ課額ヲ決定セサル時ハ其次ノ議院ノ集會スル迄ハ國費稅額等總テ舊慣ニ仍ル可シ○若シ稅額ハ決定スルモ未タ其徵收法ヲ付テ兩局ノ議一和セサル時ハ其議院ニテ定ル所ノ稅額ヲ以テ先會ノ議院ニテ決スル所ノ徵收法ニ從ヒ其多少ニ應シテ増減ヲ加フ可シ○此時機ニ於テハ議院ヨリ銀行公債

局ノ委員ニ命ジテ其根基タル定度ト新例トヲ設立セシム可シ

○西班牙

第三十六條 租稅及國債ニ關スル法律ハ先ツ之ヲ代議士院ニ附スヘシ

第七十四條 政府ハ每歲翌年ノ國費豫算ノ概表及國費ヲ支ユ可キ方法ノ意見書ヲ國會ニ送致ス可シ且租稅ノ徵收及其費用ノ報告書ヲ國會ニ併セ送り以テ其檢査ト承認ヲ受ク可シ

第七十五條 何レノ租稅若クハ入府稅府内ニ輸入スル物品ニ課スル稅ノ豫算表ノ法律若クハ其他ノ特別ノ法律ヲ以テ許認スルニ非サレハ之ヲ賦課徵收スルヲ得ス

第七十六條 政府ノ所有ヲ賣リ或ハ之ヲ易ユルコト若クハ國民ノ負

物過界ニ課スル通運税 聯邦ハ瑞士國境ニ於テ輸出入税及品物過界税ヲ收入スルコトヲ得可シ。○聯邦ハ償金ヲ糾興シテ現時瑞士國境ノ通運收税局ニ定タル屋舎ヲ購求シ又借テ之ヲ使用スルコトヲ得ヘシ

第二十五條 聯邦通運税ノ收入ハ左ノ原則ニ依準シテ規定スヘシ

第一 輸入税

甲 本國ノ工業ニ須要ナル物料ハ務テ其税額ヲ低フスヘシ
乙 生活ニ須要ナル物料モ亦其税額ヲ低フスヘシ
丙 奢侈ノ物品ハ最モ其税額ヲ高フス可シ

第二 品物過界税其他ノ總輸出税ハ勤メテ其額ヲ寬ニス可シ

第三 通運税法ハ國境及互市場ノ貿易ヲ保固スルニ適當ナル規則ヲ含有ス可シ然レ之カ爲ニ異常ノ形狀アルニ際シ聯邦

ニ於テ暫ク特例ノ處分ヲ爲スヲ妨ルコトナシ

第二十六條 輸入税及品物過界税ニ付聯邦通運ノ收額ハ左ニ掲ル

所ニ從テ享用スヘシ

甲 列邦ハ千八百三十八年ノ人別調査ニ準シ邦民一人毎ニ四

「パス」貨幣ノ名「パス」ハ大抵佛國ヲ領取ス可シ
貨幣ノ十五「サンナム」ニ當ル

乙 列邦ハ右配賦金ヲ受ルト雖モ其第二十四條ニ掲ル租税ヲ廢スルニ因テ生シタル損失ヲ全ク償ニ足サレハ千八百四十二年ヨリ同四十六年ニ至ル迄ノ五ケ年收税實則金収税ニ關スル費用ヲ引去リタル平均額ニ由リ廢税ノ償トシテ須要ナル金額ヲ領取ス可シ

丙 通運收税金ノ消費セル殘額ハ聯邦ノ金庫ニ納ム可シ

第二十七條 建築ニ供用ス可キ入費ノ金額若クハ其一分ヲ還償ス

ル爲ニ通運税若クハ橋堤税ヲ課シテ償金トスルヲ許認シタル時ハ其収金額ヲ以テ建築入費ノ元利金ヲ償フニ足コ至レハ即時ニ之カ收入ヲ廢止ス

第二十八條 前條ノ規則ハ以テ鐵道ヲ發起スル會社ト取結ヒタル契約ノ品物過界税ニ關スル條款ニ推及ス可カラス○但聯邦ニ己ノ爲ニ鐵道發起ノ契約ニ由リ品物過界税ノ收入ニ係タル列邦ト豫定セル税額ヲ收ム鐵道發起會社ニ許シタル品物過界税ハ該社之ヲ収入セシメ其列邦ニ許シタル者ハ聯邦入ス

第二十九條 飲食獸畜商貨其他土地工業ヨリ生スル產物ノ自由賣買及甲ノ列邦ヨリ乙ノ列邦ニ於ル自由出入及通運等ハ聯邦全土皆之ヲ保固ス但左ノ件々ヲ除ク

甲 賣買上ニ於テハ鹽稅火藥稅ヲ取立ル事

乙 貿易工業ノ警察及道路ノ警察ニ關スル列邦ノ規則

丙 屯貨ヲナスヲ防ク規則

丁 傳染病及獸類傳染病流行ノ時健康警察ニ關スル暫時ノ方法

○乙丙二件ノ規則ハ國民及他ノ列邦人民ニ對シテ均一ナル可シ此規則ハ聯邦行政會ニ其調査ヲ受ケ之カ承認ヲ得タル後ニ非サレハ執行スルヲ得ス

戊 國會ニ因リ准許シ又保存シテ聯邦ニ於テ未タ廢止セサル租稅 第二十四條 第三十一條參看

己 第三十二條ノ規制ニ依準セル葡萄酒其他ノ精酒類ノ「ドロア」消費稅 ○總テ精酒類ニ課スル「ドロア」消費稅ト云フ

第三十條 聯邦ハ凡テ列邦相互ノ間又列邦内ニ於テ人身及諸物品ノ水陸運漕ニ關スル特准ヲ廢スルニ須要ナル規則ヲ裁定ス可シ

但其聯邦ニ關係スル者ニ限ル

聯邦ニ得失ナキ瑣細ノ特准ハ措テ問ハス

第三十一條 第二十九條戊ノ項ニ掲タル税金ノ徵收ハ聯邦行政會

ニ於テ監察ス可シ又聯邦議會ノ准許アルニ非サレハ其稅額ヲ多

クスルヲ得ス又其收稅ノ期限ヲ豫定セル者ハ擅ニ其期ヲ延ス

ヲ得可カラス○列邦ハ何レノ名義ニ由ルモ新ニ通運稅又橋堤

稅ヲ定ムルヲ得可カラス然ル聯邦議會ハ第二十一條ニ依準シ

貿易上ニ於テ全國ノ公益トナル可キ建築ヲ勸奨スル爲メ通運稅

又其他之ニ類スル租稅ノ收斂ヲ准許スルヲ得可シ

但此建築ハ聯邦會議ノ准許ナクシテ之ヲ起スヲ得ス

第三十二條 第二十九條戊ノ項ニ掲タル租稅ノ外ニ列邦ハ左ノ制

限ニ從テ葡萄酒及其他ノ精酒類ニ消費稅ヲ課スルヲ得可シ

甲 消費ヲ收斂スルヲ以テ決シテ品物過界稅ヲ重クス可カラス

而シテ消費稅ヲ收斂スルヲハ他ノ稅ヲ課スルヲ得サル所ノ買

易上ニ務テ薄ク之ヲ課ス可シ

乙 消費スル爲ニ輸入セル物品ヲ再ヒ輸出スルハ先ニ輸入ス

ル爲ニ收タル税金ヲ還付シ別ニ稅ヲ課スルヲナシ

丙 瑞士產ノ物品ハ外國品ヨリハ其稅ヲ輕クス可シ

丁 瑞士產ノ葡萄酒其他ノ精酒類ニ現時課スル所ノ消費稅額ハ

其稅ヲ收ル列邦ニ於テ隨意ニ之ヲ高フスルヲ得ス又現時消

費稅ヲ收サル列邦ニ於テ新ニ右酒類ニ稅ヲ課スルヲ得ス

戊 消費稅ノ收斂ニ關スル列邦ノ法律及決定ハ之ヲ執行スルニ

先チ聯邦政官ノ認可ヲ受ケ以テ聯邦政官ヨリ要スルニ從テ列

邦ヲシテ前諸規則ニ注意セシム可シ

第三十三條 聯邦ハ左ノ規則ニ依準シテ全瑞士國ノ驛遞事務ヲ管

理ス

千五十一

- 第一 驛遞事務ハ概シテ之ニ關係スル列邦ノ承認ナケルハ其現時ノ景況ヨリ減縮ス可カラス
- 第二 郵便税モ亦第一項ニ同キ原則ニ準シ務テ瑞士全國ニ於テ其價額ヲシテ平均ナラシム可シ
- 第三 信書秘密ノ侵ス可ラサルヲ保固ス
- 第四 聯邦ハ驛遞權ヲ列邦ヨリ取テ後之ニ其價ヲ給ス可シ
- 甲 列邦ハ每歲千八百四十四五六ノ三年間本邦郵便税實利金ノ平均額ヲ領受ス○然レ聯邦ハ郵便税ヨリ得ル所ノ實利金ヲ以テ右價金ヲ辨スルニ足サル時ハ其得ル所ノ實利ニ比率シ價金ノ額ヲ減少シテ列邦ニ給與ス可シ
- 乙 列邦自ラ驛遞權ヲ受用スルニ由テ直接ニ収税セサル時

- 列邦政府驛遞權ヲ邦民若クハ會社ニ委託シテ該邦民若クハ會社ヨリ間接ニ其税ヲ納ルヲ謂フ 又他ノ列邦ト取結タル驛遞條約ノ故ヲ以テ其得ル所ノ實利却テ少ク且本邦ニ於テ驛遞權ヲ受用スル時ハ價金ヲ定ムルニ當リ公平ニ其景況ヲ酌量ス可シ
- 丙 平民ヲシテ驛遞權ヲ受用セシメタル時ハ聯邦ヨリ之ヲ償フ可シ
 - 丁 聯邦ハ應當ノ價ヲ給シテ驛遞事務ニ屬シテ其用ニ適當シ且須要ナル物具ヲ購求スルノ權義ヲ有ス
 - 戊 聯邦驛遞局ハ價金ヲ給シテ現時驛遞ニ供用スル家屋ヲ購求シ又借受スルノ權ヲ有ス
- 第三十四條 通運税局及驛遞局ノ官吏ハ大抵該局ヲ設置スル列邦ノ人民中ヨリ選任ス可シ

千五十一

第三十五條 聯邦ハ其保存ス可キ所ノ道路橋梁ヲ監督ス又聯邦政
官ハ之ニ關係スル列邦郷保若クハ平民此等ノ道路橋梁ニ應當ノ
修補ヲ加ヘサル時第二十六條及第三十三條ニ依リ列邦ニ給與ス
可キ金額ヲ停ム可シ

第三十八條 火藥ヲ製造シ及之ヲ販賣スルコトハ全瑞士國ニ於テ特
ニ聯邦ニ屬ス

第三十九條 左ノ金額ヲ以テ聯邦ノ費用ヲ支ユ

甲 聯邦軍備金ノ利子

乙 瑞士國境ニ於テ收斂スル聯邦通運稅ノ益金

丙 驛遞ノ益金

丁 火藥ノ益金

戊 聯邦議會ノ決定ノ力ニ由ルニ非レハ收斂スルコト能ハサル列

邦ノ租稅○右租稅ハ二十年毎ニ查正ス可キ所ノ課稅表ニ準シ
テ列邦ヨリ收納ス○課稅表ヲ查正スルニハ列邦ノ人口貧富及
其産業ヲ察シテ之カ基礎トナス可シ

第四十條 聯邦ノ金庫ニハ聯邦兵ヲ徵集スル軍費ヲ助ル爲ニ平常
少クハ列邦ヨリ納ル、所ノ租稅ニ倍スル金額ヲ貯藏ス可シ

第五十二條 兩國互ニ契約スル場合ノ外外國ニ對スル地方商貨稅
モ亦之ヲ廢ス

○葡萄牙

第三百三十六條 國租ノ出納ハ國庫ト名クル法衙ニ委任スヘシ該法
衙ハ法律ニ依リ適宜ニ定タル諸局ヲ置テ國稅ノ管理徵收及理財
法ヲ規定スヘシ

第三百三十七條

國債ノ利子并ニ其還償ニ供備スヘキ租稅ヲ除クノ外凡直稅ハ每歲國會ニ於テ規定スヘシ然レ該直稅ヲ廢止シ若クハ改置スルノ日ニ至ルマテハ舊コ仍テ之ヲ存置ス

第三百三十八條

大藏卿ハ他省ノ卿ヨリ本省ノ支費豫算表ヲ交収シ國會ノ集合スヘキ每歲代議士院ニ國庫前年ノ出納總決算表及明年ノ國費並ニ總租稅國入ノ總豫算表ヲ具送スヘシ
增補律例第十二條ニ云ク租稅ハ每歲公評
ス租稅ヲ定タル法律ハ一歲ヲ限リ之ヲ施行ス○公費ノタメニ公評
用途金ニ移シ用ユルヲ云テ許認スルノ外他件ノ支費ニ享用スル
ヲ得ス
第一○國入ノ管理及收斂ハ法律ニ由リ其構掌ヲ規定スヘキ會
國庫ニ於テ之ヲ施行ス
第二○法律ニ由リ其構掌ヲ規定スヘキ會
計法院ヲ置クヘシ
第三○第十三條ニ云ク代議士院建設ノ日ヨリ
十五日內ニ政府ハ明年ノ出納豫算表ヲ該議院ニ送附スヘシ及其
建設ノ日ヨリ一月內ニ前年ノ決算表ヲ亦之ニ送附スヘシ○建國
修正スルヲ斯ノ如シ

○荷蘭

第一百十九條

王國ノ出納豫算表ハ法律ヲ以テ定ム

第一百二十條

歲計豫算表ニ管スル法律議案ハ連歲該豫算表ニ係ル前年ニ當リ國會ノ通常會ノ通常會期ヲ開キタル後即時ニ國王ノ名ヲ以テ下院ニ送附ス

第一百二十一條

歲計豫算表中支費ノ各章ニ管スル支費ヲ特記ス○支費ノ各章ヲ以テ或ハ一箇ノ法案トナシ或ハ數箇ノ法案トナス法律ヲ以テ此章ヨリ彼章ニ支費ヲ移易スルヲ許認スルヲ得

第一百二十二條

每歲ノ出納決算表ハ統計院ニ於テ承認シタル簿冊ニ併セ立法官ニ送附ス○出納精算ノ差額ハ法律ニ由テ整頓ス

第一百七十一條

凡法律ニ依ニ非レハ國租ヲ定立スルヲ得ス

第七十二條 租稅ニ係リ苟モ特准ヲ與フルヲ得ス

第七十三條 政府ヨリ其債主ニ對スル義務ハ保固トス國債ハ每歲債主ノ利益ヲ量リテ考訂ス

第七十四條 法律ハ貨幣ノ斤量品性及其價直ヲ規定ス

第七十五條 貨幣事務ヲ監護スルヲ及貨幣ノ品性検査等ニ付テ起タル爭ヲ判決スルヲハ法律ヲ以テ定ム

第七十六條 統計院ノ設置及權任ハ法律ヲ以テ定ム○國王ハ國會ノ下院ヨリ上奏スル三員ノ應撰人姓名表ニヨリ撰テ統計院ノ缺員ヲ補任ス○統計院ノ僚員ハ終身其職ニ任ス其俸給ハ法律ヲ定ム○第六十三條第二節ハ統計院ノ僚員ニ準用スヘシ

○丁 抹

第四十七條 一法律ノ力ニ由ルニ非スレテ賦稅ヲ定ム或ハ變更シ及之ヲ免除スルヲ得ス又一法律ノ効ニ由ルニ非レハ兵士ヲ募リ及國債ニ付テノ約束ヲ定メ或ハ政府ニ屬スル土地ヲ讓ルヲ得ス

第四十九條 豫算表ノ決定ニ由ルニ非サレハ租稅ヲ賦ス可ラス豫算表及格別ナル費額ノ決定書ニ由ルニアラスレテ國財ヲ使用スルヲ得ス

第十五 國憲修正

○佛蘭西 一千七百九十一年

第二百三條 今般憲法會ニ於テ國民己ノ憲法ヲ改正スルノ權ハ限
リナカル可キヲ公告ス尤其憲法ノ内經驗ヲ得テ障礙ヲ生スル
ヲノ顯ハレシ箇條ヲ改正スルニ憲法ニ定タル法式ヲ以テ之ヲ爲
スルハ國民ノ爲ナルヘシト勘考セシ故ニ左ノ法式ヲ以テ一ノ改
正ノ公會ニ之ヲサシムヘキヲ定ム

第二百四條 民選議院ノ議員已ニ三回交代セシト 二年目ニ 雖モ憲
法ノ何條ヲ變革セシト其會席毎ニ逐次願シ節ハ其箇條ヲ必ス
改正スヘシ

第二百五條 此後集會スヘキ第一回ノ民選議員及其後集會スヘキ
第二回ノ民選議員ハ何レノ憲法ノ箇條ノ改正ヲモ進願スルヲ得

ス

第二百六條 憲法ノ改正ヲ進願スルヲ得ヘキ民選議員ノ會席即チ
第三回及第四回ノ民選議員ハ其末年會席ノ終リノ二ケ月中ニ右
憲法改正ノ事ヲ爲シ得可シ第五回ノ民選議員ハ右憲法改正ノ事
ヲ初年會席ノ終リ或ハ末年會席ノ始ノミ之レヲ爲シ得可シ
ノ會席ノ期限二年ト定シニ因テ前文ノ第二百四條第百五條第
二百六條ノ主意ハ憲法ヲ布告セシ上四年過タル後其憲法ノ改正
ヲ進願スルヲ得ヘシ且六年間續テ其改正ニ關スル
ヲ願ハサレハ改正ス可カラストノ意ナリ○憲法ノ改正ニ關スル
民選議院ノ評議ノ法式ハ立法ニ關スル民選議院ノ評議ノ法式ト
同様ナルヘシト雖モ其憲法ヲ改正セシト進願スル布令ハ國王
ノ確定ヲ受ルニ及ス

第二百七條 後ノ第六回ノ民選議院ノ議員ノ數二百四十九名ヲ添
ヘテ憲法改正議院ヲ編制ス可シ 各州ハ己ノ爲メ民數ニ基ヒテ定

へし〇前文ノ第三篇此二百四十九人ハ各州ヨリ撰任スヘキ通例第一章第一款見合セノ議員ヲ撰ヒシ後撰任スヘシ且其爲メ格段ノ調書ヲ作ルヘシ憲法改正議院ハ一ニシテ分ツヘカラサル者トス

第二百八條 憲法ノ改正ヲナスヘキヲ進願セシ第五回ノ民選議員ハ憲法改正議院ニ選任スヘカラス

第二百九條 憲法改正議院ノ議員ハ自由ニ生スル能ハサレハ寧ロ死スヘシトノ誓ヲ共ニ建テ、後各人ヲシテ左ノ誓ヲ立シムヘシ

「我前三箇ノ民選議院ト同様進願セシ事件ニ就テノミ決議スヘシ且千七百八十九年千七百九十年及千七百九十一年ニ憲法議院ヨリ布告シタル國ノ憲法ヲ力ヲ盡シテ保護スヘシ且孰レノ事ニ就テモ國家ト法律ト國王トニ對シ忠義ヲ竭スヘシ

第二百十條 憲法改正議院ハ己レニ進達シタル事件ヲ直ニ爲テ得

へシ且其評議ノ所業終リ次第加員ノ二百四十九人ハ立法ノ所業ニ關係セズ退散スヘシ

一 亞細亞阿弗利及亞米利加ニアル佛蘭西屬國ハ前文ノ憲法ニ關スルコトナシ

一 憲法ニヨリテ設立シタル孰レノ官モ此憲法ノ全部ヲ變改シ或ハ其内孰レノ細條モ改正スヘカラス 但第七編ニ定タル手續ヲ以テ爲セシ改正ハ格別ナリ

一 尙此建國法ノ保護ハ國會ニ於テ之ヲ民選議院ト國王ト裁判役トノ忠義ニ依頼シ家長妾母ヲシテ之ニ注意スルコトヲ命ス猶幼年者ノ愛情總テ佛蘭西國民ノ勇氣ニ之ヲ任預ス

一 右憲法上ニ掲載セサル事ト雖モ既ニ憲法議院ヨリ爲セシ布令ハ法律トシテ執行セシムヘシ又右憲法上ニ改サル舊法ハ民

選議院ヨリ之ヲ廢シ或ハ改正スル迄ハ依然トシテ執行スヘシ

○佛蘭西 一千七百九十三年

第百十五條 若シ佛蘭西ノ州ノ全數ノ中過半ノ州ニ於テ法律ニ循テ編制シタル下會ノ十分一憲法ノ改革或ハ憲法ノ何條ヲ改正セント願フキハ民選議院ハ憲法改正議院ヲ召集スヘキヤ否ヲ尋問セシカ爲メ共和國ノ總テノ下會ヲ召集スヘシ

第百十六條 憲法改正議院ハ民選議院ト同様編制スルモノニシテ民選議院ノ諸權ヲ有ス

第百十七條 憲法改正議院ハ召集シテ改正スヘキ憲法ノ箇條ノ外憲法ノ他條ニ管スヘカラス

○佛蘭西 一千七百九十五年

第三百三十六條 建國法ノ内其經驗ヲ得テ障礙ヲ生スヘキト顯ハシテ箇條アルキハ老人議院之ヲ改正スルヲ勸告スヘシ

第三百三十七條 右場合ニ於テ老人議院ノ勸告シタル條件ハ五百員議院ノ承諾ヲ請フヘシ

第三百三十八條 五百員議院ヨリ確定シタル老人議院ノ勸告ハ九年間ニ三年間ヲ隔テ三度爲シタルキハ憲法改正會議ヲ召集スヘシ

第三百三十九條 憲法改正會議ハ各州ヨリ議員二人ヲ選任セシメ之ヲ以テ編制スル者ニシテ其選任ノ方法ハ民選議院ノ爲メ選任ト同シ且憲法改正會議ノ議員トナル爲メ國民ニ於テ適當節要スル條件ハ老人議院ノヲメ定タル條件ト同シカルヘシ

第三百四十條 憲法改正會議ノ集會スル所ハ民選議院ノ會席スル

所ヨリ少クモ微萬メートル^二三尺三寸^一ヲ隔ツルヲ要ス

第三百四十一條 憲法改正會議ハ己ノ會席所ヲ移轉スルヲ得ヘシ

尤前條ニ記シタル距離ヲ守ラサルヲ得ス

第三百四十二條 憲法改正會議ハ立法上或ハ政事上ノ孰レノ事務

ヲ勤メサル者ニシテ民選議院ヨリ己ニ示シタル憲法ノ箇條ヲ改

正スルヲコノミニ管スヘシ

第三百四十三條 憲法改正會議ヨリ勸告シタル憲法ノ改正ハ佛蘭

西國民ノ承諾スルマテハ憲法ノ箇條盡ク續テ行フヘシ

第三百四十四條 憲法改正會議ノ議員ハ相共ニ協議ス

第三百四十五條 憲法改正會議ヲ召集スルキハ既ニ民選議院ニ屬

スル者ハ憲法改正會議ノ議員ニ選任セラレハカラス

第三百四十六條 憲法改正會議ハ其定タル改正ノ見込書ヲ直ニ國

中ノ下會ヘ送ルヘシ且之ヲ送リシ後解散スヘシ

第三百四十七條 孰レノ場合ニモ憲法改正會議ハ三ヶ月ヨリ長ク

會席スル能ハス

第三百四十八條 憲法改正會議ノ議員ハ其勤務中發言或ハ記セシ

トニ就テ之ヲ搜索及告訴シ或ハ裁判スヘカラス又右議員ハ在勤

中ナレハ憲法改正會議ノ決定ニ因サレハ之ヲ裁判スヘカラス

第三百四十九條 憲法改正會議ノ議員ハ孰レノ公然ノ禮席ニモ整

列シテ出ルヲ得ス且其議員ハ民選議院ノ議員ノ爲メ定タル扶助

金ヲ受ヘシ

第三百五十條 憲法改正會議ハ己ノ會席スル所ノ邑ニ於テ取締ヲ

管理シ或ハ管理セザムルヲ得ヘシ

第三百七十五條 建國法ヨリ設立シタル孰レノ官モ前第十三編ニ記スル所ニ從テ爲シタル建國法ノ改正ノ外ハ建國法ノ全部或ハ一部ヲ變改スルノ權ナシ

○佛蘭西 一千八百〇二年

共和政事八年ノ建國法ヲ制立スル爲メ發シタル元老院ノ建國決定書右ハ千八百〇二年八月四日ニ發シ國民ハ三百五十六セチナニス、コンシユル〇護法元老院ハ建國法ノ第九十條ニ定タル數ノ議員集マリテ當日附共和國宰相ノ告書ヲ檢シ右告書ノ文意ハ建國法ヲ制立スルニ元老院決定書ノ院ヘ出頭セシ議案ヲ元老院ヘ勸告スル爲メ政府ノ發議人三人ヲ當ムルヲナリ又同日附共和國第一等ノ「コンシユル」ノ決定ニヨリ右發議ノ職務ヲ委託シタル「レコエ」ホルタリス及「デツソル」八ト云者國議院議官ノ元老院ヘ進呈シタル元老院決定書ノ議案ヲ檢達シ右

議案ニ付テ政府ノ發議人ノ論辨ヲ聽入レ且當月十一日ニ己ノ議員ノ内委任シタル委員ノ屆書ニ基キ決議ヲ爲シテ各條々ヲ布告ス

○佛蘭西 一千八百〇四年

皇帝政事ヲ設立スル元老院ノ建國決定但シ右ハ千八百〇四年五月十八日ニ發シ且國民ハ三百五十七萬二千三百二十九投票ヲ以テ之ヲ承諾セリ〇護法元老院ハ建國法ノ第九十條ニ定タル數ノ議員集マリテ千八百〇二年八月四日元老院建國決定ノ第五十七條ニ從ヒ作タル元老院決定ノ議案ヲ檢シ右議案ニ付テ政府ノ發議人ノ論辨ヲ聽入レ且當月廿六日ニ己ノ議員ノ内委任シタル委員ノ屆書ヲ檢シ右千八百〇二年元老院建國決定ノ第五十六條ニ定タル投票ノ數ヲ以テ其議案ヲ決議セシ後各條々ヲ決定ス

○佛蘭西 一千八百十五年

天主ノ恩并ニ建國法ニヨリ佛蘭西國民ノ皇帝タル那破崙現今及將來ノ人民ニ頓首ス

朕十五年以前佛蘭西國民ノ志望ニヨリ國ノ政治ヲ執リシ時ハ國民ノ必要及所望ヲ窺ヒ經驗ニ乘シ時々建國ノ体裁ヲ改正スル爲メ盡力セリ即チ所謂帝國ノ建國法ハ時ヲ得テ追々作立シ國民ノ承諾ヲ受タル種々ノ公書ヲ以テ編制ス○其節朕ハ當代ノ人意ニ適シ且文明開化ノ進歩ヲ助ク可キ者トシテ歐洲列國ノ大政道ヲ設ク可キノ主意ヲ抱キ又之ヲ全備シ廣大ニシ萬代不易ノ基礎ニ立テ置ント思惟スル間ニ國君自由ノ權利ヲ定メシムルニ要スル處ノ國內諸制度ノ編成ヲ延引セシカ今ハ朕國民自由ノ權利ヲ確定シテ以テ國ノ

隆盛ヲ増加スルノ外主意ナシ然レ之ヲ爲スニ帝國ノ建國法元老院ノ建國決定書及國ノ立政ニ管スル他ノ法ニ大切ナル改正ヲ加ヘサルヲ得ス因テ一方ハ古來ノ制度ノ中用ニ立ツ可キ分ヲ守リ一方ハ帝國ノ建國法人民ノ必要國法人民ノ必要及必望ニ應シ以後朕歐國ヲ繼守セントスル平和ノ交際ニモ適スル様要スル處ノ改正ヲ此建國法ニ加ヘントス因テ右建國法ヲ修正シ國民ノ權利ヲ保證シ國民理ノ政治ト云政治ノ方法ヲ成可ク丈ケ廣大ニシテ皇帝ト國民間ノ諸官ニ其要スル所ノ尊敬及威權ヲ與ヘ抑一方ハ國民ノ自由及國民ノ保身ノ權限ヲ弘メ一方ハ他國ヲシテ佛蘭西國ノ獨立ヲ守ラシメ朕ノ冠ヲ恭敬セシム可キ様要スル所ノ本政合歸ノ權力ヲ立ツ可キ爲メ政政ノ條則ニ付テ追々國民ノ承諾ヲ請ントス即チ建國法ノ副書トシテ各條々ハ公然ニ全國中ニ之ヲ布告シ國民ノ隨意ノ承諾

ニ之ヲ進告ス可シ

千七十

第一條 帝國ノ諸建國書殊ニ千七百九十九年十二月十三日附ノ建國法ト千八百二年八月二日及四日又千八百四年五月十八日附ノ元老院建國決定書等ハ各條ニ從テ之ヲ改正ス然レ各條ニ管セサル同法同決定書ノ他ノ條ハ之ヲ續テ用フ可キ者トシテ此ニ確定ス

○佛蘭西 二千八百三十年

佛蘭西國民ノ王タルルイヒリブ當今并ニ將來ノ人民ニ頓首シテ左ノ事ヲ告スルナリ○千八百十四年附ノ建國法ハ當年八月七日ニ上院下院ヨリ之ヲ改正シ且同八月九日朕ヨリ之ヲ承諾シタル儘ニ各文面ヲ用ヒテ更ニ之ヲ公告ス可シ

第六十八條 「カル、ス」第十世在位間ニ新ニ設タル處ノ議官ノ位并ニ右爲シタル處ノ「ペール」ノ委任ハ皆効シナカル可キ者ニシテ之ヲ廢ス○尙建國法ノ第二十三條ハ千八百三十一年ノ會席中更ニ之ヲ評議ス可シ

第六十九條 左ノ件々ハ追々格別ナル法律ヲ設ケ以テ勤テ速カニ之ヲ定ム可シ

第一 版告ニ付テノ輕罪裁判并ニ政事上ニ付テノ輕罪裁判ニ陪審ヲ該用スル事

第二 諸卿并ニ他ノ官員ノ責任ノ事

第三 代議者如シ給金ヲ受ク可キ所ノ公役ヲ任シタル時ハ其代トシテ他人ヲ選任ス可キ事

第四 徵兵ノ總數ヲ年々下院ニ決議セシム可キ事

千七十一

第五 報告兵ノ編成方法但右兵卒自ラ其士官ノ選舉ニ參加ス可キ事

第六 海陸軍士官ノ分限ヲ保存スル爲メノ法則ノ事

第七 州邑ニ於テ人民ノ任選ニ依ル可キ處ノ制度ノ事

第八 公學ノ設立方法并ニ教授ノ所業ヲ自由ニスル事

第九 代議者任選ニ付キ二段ノ等級ヲ廢スルヲ又人民ノ選立人并ニ代議者トナルヲ得ルニ適ス可キ件々ヲ決定スル事

第七十條 斯ク改正シタル建國法ノ條々ニ背ク規則ヲ定ル所ノ現今ノ法律并ニ布告ハ其背キタルヲニ付以後之ヲ廢シタル者コシテ効ナカル可シ

○佛蘭西 一千八百四十八年

第二十二條 若シ議院ハ建國法ヲ改正スヘキキハ代議者ノ數ヲ九

百人迄増加スヘシ

第八條 勳社ハ従前ノ如ク修存スルト雖モ其結社ノ定則ヲ改正シ建國法ニ適當セシムル様爲ス可シ

第一百一條 民選議院若シ其會議スヘキ所ノ時間ノ終リシ年中建國ノ全部或ハ一部ヲ改正セシメントノ望ヲ發シタル時ハ左ノ如ク其改正ヲ爲ス可シ

- 一 凡右望ム所ヲ決議セサル前ニ一ヶ月間ヲ隔ツ可キ處ノ三箇ノ決議ヲ爲シ其各決議ノ投票ノ四分ノ三ニヨリ之ヲ爲サ、ルヲ得ス又各決議ノ投票ヲ出ス人ノ數五百人以上ノ數アル可シ
- 一 建國法改正議院ヲ一ヶ所設ケ三ヶ月限リ勤ム可シ○右改正議院ハ其己レニ任シタル建國法改正事務ノミヲ勤ム可シ然モ

急速ナル場合ニ於テ立法ノ必要ナル事務ニ供スルヲ得可シ

○佛蘭西 一千八百五十二年

○憲法ヲ制定スル原由 千八百五十二年一月十四日布告佛蘭西共和政治ノ大統領路易拿破崙ノ佛蘭西人民ニ告諭ノ書
去歲十二月二日ノ布令書ニ佛蘭西國ノ政體ヲ創建スル爲メ緊要ノ基礎ハ何物タルヲ余カ嘗テ思念セシ所ニ就キ以テ誠實ニ汝衆庶ニ告諭セリ而シテ余カ當時ニ在テ思念セシ所ハ世人ノ常ニ稱道スル如ク敢テ一己ノ私説ヲ以テ數百年間實際ノ試験ヲ經タル定論ニ換用セント欲スルニ非ラス唯往時ニ在テ當今ノ軌範ト爲ス可キハ何物ニシテ其軌範ハ又何人ノ之ヲ今ニ遺シ且何等ノ裨益ヲ生セシヤ此等ノ數事ヲ講求セント欲セシニ在リ故ニ爾來余ハ世人ノ實踐ニ関セサル飾觀裝聽ノ論說ヨリ寧ロ俊傑ノ士躬行ノ跡ニ就キ其精英

ヲ採擇シテ時ニ施スノ道理ニ合スルヲ思ヒ此ニ於テ千八百年代ノ初メ其形勢ノ恰モ現今ト相似タル危殆ノ佛蘭西國ヲシテ康寧ノ景福ヲ享ケ隆盛ノ極治ニ至ラシメタル其政體ヲ以テ軌範ト爲ス可キヲ決セリ而シテ願ミルニ又其政體タルヤ往時特ニ歐洲諸國ノ全力ヲ合シ我佛蘭西國ニ抵敵シテ纒カコ廢滅ニ至ラシメ人民劇發ノ變ニ因リ頓ニ崩潰ニ至リシ者ニ非サレハ是亦余カ以テ軌範ト爲ス所ナリ因テ此ニ余カ大趣旨ト爲ス其要ヲ概言スルニ凡ソ我佛蘭西國ハ政法ノ施設兵旅ノ簡閱ヨリ審判法教經濟等ニ至ル迄要スルニ皆嘗テコンシユル「政治及ヒ皇帝政治ノ際創定シタル條規 即チ拿破崙ノ創定シタテ遵用シ今ニ於テ既ニ五十年ニ及ハハ豈其政體ニ於テ獨リ之ヲ遵用セサルノ理アラシヤ況ヤ其政體ハ夫ノ政法兵旅審判法教經濟等ノ條規ト同ク亦嘗テ拿破崙帝ノ慮定セシ所ニ出レハ其我國

家ヲ利シ以テ人民ヲ益スルノ微義ヲ具フルヤ必セリ加フルニ余カ
 嘗テ布令セシ書中既ニ辨明シタル如ク今此ノ佛蘭西ハ蓋シ千七百
 八十九年ノ大變革ニ因リ改造シタル國ニシテ往昔ノ政憲ハ今ニ至
 リ猶其鴻益ヲ享ケ衆庶ノ特ニ退慕スル所ト雖也其制度典章ハ當時
 ニ在テ盡ク散滅シ今ニ於テ存スル者ハ亦皆大變革ノ後拿破崙帝ノ
 制定セシ所ニ出レハ此佛蘭西國ハ實ニ拿破崙帝ノ整修條治セシ者ト
 謂可キナリ故ニ今其變革以來更修シタル梗概ヲ舉ケ之ヲ論スルニ
 往昔ノ「プロファンス」古ノ土地ヲ「ベーデタ」古佛蘭西王ノ統屬ニシテ
 理セ「ハルレマン」古ノ裁判區分セシ名「自カラ其轄内ノ諸務ヲ管
 シ國」ハルレマン所ノ名「各州ノ監察使」ヘルミエーゼチラル「爲メ國
 中ノ租稅納方各地殊異ノ風習封建ノ制度文武ノ官ニ補任チ得ル特
 ナ引受ケシ者」權ノ貴族諸般法教ノ管轄等ハ夫ノ大變革ノ日其政令ト並行ス可キ
 ニ非サルカ故ニ當時悉ク之ヲ更改シ方今復タ存スル者ナシト雖也變

革ノ際未タ其制度ヲ確定シ治法ノ後ニ垂ル可キ者ヲ創スルニ及ハ
 ス是以テ凡ソ今ノ我佛蘭西國ヲ合同ナラシメ百官有司ノ職制ヲ立テ
 政治ノ基礎ヲ固定シタルハ是レ皆嘗テ拿破崙帝ノ心力ヲ竭セシ所
 ニ出テ當時ニ在テ其制定シタル佛蘭西各地方行政ノ權ヲ「プレヘ」
 「一州ヲ管轄ス」一郡ヲ管轄「メイル」一邑ヲ管轄ニ任シ以テ
 スル官吏「ス」一郡ノ官吏「メイル」一邑ノ官吏
 往昔各地各異ノ政治ヲ一定ニ爲シ且諸務ヲ決議スル權ハ一州ヨリ
 一邑ニ至ル迄皆人民ノ撰舉スル代理者ノ會議ニ任シ又裁判役ヲ
 テ畢生間其職ニ居ラシメ裁判所ノ等級ヲ立テ、其權ヲ牢固ニ爲シ
 下ハ治安裁判所ヨリ上ハ覆審院ニ至ル迄皆其統括ノ諸務ヲ分明ニ
 限制シ以テ審理ノ法ヲ容易ナルニ至ラシメタル諸件ノ如キ今猶現
 ニ之ヲ循用ス而シテ又我國最良ノ經濟法、國立銀舖ノ設立、政府ノ歲
 出歲入ノ積蓄、政府出額ノ檢査院及ヒ警察ノ制度、兵制ノ規律等

モ亦皆拿破崙帝ノ時創定セシ所ニ循ヒ就中我國五十年來人民交誼ノ條則チ定メシハ即チ拿破崙帝ノ創制シタル民法ニ在リ又我政府ト僧徒ノ交際ヲ定メタルハ嘗テ拿破崙帝ノ羅馬教皇ト結ビシ條約書ニ因リ其他製造貿易學術技藝ノ進歩ニ管スル法令モ其テアトル「フアンセー」演劇「フリユドナム」製造所ノ財主ト「工丁」等ノ規則ニ於ケル細故ヨリ大學社及ヒ「レシヤ」勳勞ナル者ヲ賞スル文武ヲ論セス國ニ大勳勞アル者ヲ賞スル云フ等ノ大事ニ至ル迄亦其過半ハ拿破崙帝ノ命ニ因リ制定セシ所タリ故ニ今試ニ我佛蘭西國ノ法律制度ヲ統合シ以テ之ヲ厦屋ニ喩フルニ凡百ノ工人ヲ督理シテ此厦屋ヲ建造シタル其匠頭ハ即チ拿破崙帝ニシテ既ニ其廢黜ニ遇ヒ帝位ヲ限リシ以來相繼テ三次ノ大變革ヲ經ルト雖モ嘗テ其建造シタル厦屋ニ於テハ毫モ損壞セズ依然トシテ猶全存シ拿破崙帝ノ裁定シタル諸般ノ制度今ニ相承ケ遵

用スル既ニ如此ナレハ意フニ其建設シタル政體ノ大憲モ亦之ヲ循行セサルノ理ナキ「特ニ明カナリ」是以テ余嘗テ數年以來沈潜反覆此等ノ事ヲ思念シ既ニ心ニ決セシ故ニ更ニ夫ノ共和政治立國第八年ノ憲法即チ拿破崙一世ニ原キ新タニ憲法ノ要領ヲ編成シ以テ汝衆庶ニ告示シテ其可否ヲ汝衆庶ノ聽斷ニ任セント欲ス故ニ今余カ告示スル所汝衆庶ノ相與ニ許可スルヲ得ハ直ニ以テ我佛蘭西國憲法ノ基礎ト爲ス可キニ因リ次ニ揭示スルニ其趣旨ヲ以テス夫レ我佛蘭西國ハ八百年來立君ノ政治ニシテ政府ノ權勢日々逐ヒ増加セシカ故ニ竟ニ王權ヲ以テ諸ノ侯伯ヲ廢滅シ政府ノ權ヲ一定シテ速カニ施行スルノ阻礙タル可キ事故ハ既ニ數次ノ大變革ニ因テ盡ク除去スルヲ得ルニ至リ而シテ斯ク其權ノ政府ニ歸スル國ニ於テハ常ニ衆庶ノ論ヲ以テ國家ノ利害得失之ヲ政府ノ長ニ歸ス故ニ其長タル者

ハ國家衆務ノ責舉テ之ヲ其一身ニ任セサル可カラス然ルニ若シ憲法ノ首文ニ於テ其身敢テ其責ヲ負荷スル主者ニ非サルヲ記シ以テ衆議ノ是非ヲ遁レント欲セハ是レ轉々詐僞ヲ修飾シテ夫ノ三次ノ大變革ニ因リ既ニ廢滅ニ至リシ僞法ヲ更ニ舉ケ行ハント爲ス者ト謂可シ故ニ今余カ此ニ制定セント爲ス憲法ハ汝衆庶ノ撰擇セシ政府ノ長汝衆庶ニ對シ自ラ其責ニ任シ國ノ大事ハ汝衆庶ノ審決ニ委シ而シ汝衆庶ヲシテ其長ニ信從倚賴スルノ意ヲ探捨存廢各其自由ニ任セシメ敢テ強サルニ在リ余故ニ謂ラク凡ソ今此政府ノ長ハ國家ノ衆務舉テ之ヲ一身ニ集メ以テ自カラ其ノ責ニ任スレハ要スルニ施爲其ノ自由ヲ得テ妨礙ノ處ナキヲ慮セサル可カラス故ニ大ニ其ノ長ノ意ヲ啓沃シ以テ相左右スルニ足ル貴重ノ宰相ヲ置テ其ノ保護ニ依ルヲ緊要トス然レ之ヲ往時ニ考フレハ其宰相タル者相與

ニ聯結シ專ラ庶政ノ責ニ任シテ常ニ政府ノ長ノ意ト議院ノ施設ヲ阻撓シ其勢相容サルカ故ニ宰相ノ除授日ニ相尋キ政府建設ノ諸務之ヲ繼行スル能ハサルノ弊アリト雖モ今余カ任用セントスル宰相ハ各其職ヲ分テ交互連帶以テ其責ニ任セシメサレハ敢テ此弊ヲ生スルノ虞ナク共ニ治化ヲ燮理スルニ足ル可シ然レ人ノ位階貴重ヲ極メ施爲其自由ヲ得テ民庶ノ依頼特ニ大ナル時ハ顧ルニ又常ニ道理ヲ討論シ可否ヲ獻納スル輔翼ノ職數員ヲ置キ以テ相咨詢ス可キニ在リ因テ更ニ參議ノ官ヲ設ケ政府ノ真正ナル輔翼ノ員ニ充テ余カ制定スル政憲ノ主機ト爲スヲ欲シ而シ且其員ニ充ル者ハ皆世故ニ諳練スル精妙ノ撰用ヒ之ヲ各異ノ委員ニ派シテ互ニ法律ノ議案ヲ草セシメ更ニ其草案ヲ集議シ辨論シテ修飾セス衆庶ノ與聽ヲ禁シテ仔細ニ相酌議セシメ然ル後之ヲ議院ニ附シテ其許可ヲ得セシムルニ在レハ思フニ

政府ノ施爲常ニ其自由ニ任シ施行スル所道理ニ悖ルノ憂ナキヲ得可シ故ニ此兩職ハ特ニ余ノ依頼スル所ト雖モ議院ノ國家ニ於ケル顧ミルニ又緊要ノ設ケタレハ之ニ附スルニ行政官ヲ監督スル權ヲ以テシ而シテ今其制ヲ舉クルニ蓋シ議院ノ代理者ハ其可否ヲ進フル多寡ニ從ヒ以テ法律及租稅ヲ議定セシメ且其員ヲ選舉スル制ハ必ス國內人民ノ投票ヲ用ヒ一人毎ニ之ヲ選舉セシメ數人ヲ合セ選舉セシムルヲ聽サ、ル者是レ其受選者平生ノ器識才望之ヲ知ルノ容易ナルニ在テ又其代理者ノ數ヲ限定シ凡ソ二百六十員ニ過キシメサル者要スルニ事ヲ議スルハ其靜肅ナルヲ欲シ若シ其員ノ多キニ過クル徒ラニ喧囂ノ害ヲ生シ忿争ニ至リ易キノ弊ヲ防クニ在リ而シ又此議院商議ノ旨趣ヲ普ク民庶ニ聞知セシムル其摘撮書ハ唯其議長ノ管照ヲ受ケ以テ記ス可キ官鑄新聞紙ニ之ヲ載スルヲ許スト

雖モ往時ノ外偏頗ノ心ニ任セ互ニ異論ヲ立ツル各自ノ新聞紙上ニ印刷スルハ之ヲ禁ス可シ又此議院ハ自由ニ法律ノ議案ヲ商議シ其可ト爲ス者之ヲ採用シ不可ト爲ス者之ヲ拒止スルヲ得可シト雖モ從來政府施行ノ制度ハ頓ニ更改ヲ事トシ之ヲ紊亂シ政府ノ處置ヲ妨害ス可カラズ殊ニ此議院ニ附スルニ法律議案ノ起草ヲ爲スヲ禁セントスルモノハ蓋シ之ヲ議院ニ委シ以テ其意見ニ任スル時ハ或ハ員中ノ一代理者未タ其講究セサル諸般ノ事由ヲ建議シテ自カラ政府ノ權ニ代ラントスル大弊害ノ生ス可キニ因レリ而シテ又此議院ノ員ハ敢テ往時ノ如ク宰相ト相對シ以テ法律ノ議定ヲ爲サシメ且其議案ハ參議ノ員ヲシテ自カラ議院ニ至リ之ヲ酌議シテ互ニ其利害ヲ論シ是非ヲ辨セシムルカ故ニ徒ラニ模糊タル事端ヲ固執シテ難詰謗罵交々異見ヲ持シ到底此宰相ヲ黜ケ彼宰相ニ易フル目

的ニ因リ執争辨駁以テ空ク時間ヲ費スニ至ル害ヲ除去ス可シ故ニ
今此議院ノ商議ハ之ヲ闔院ノ獨議ニ附シ敢テ他ノ抑制ヲ受ケシメ
ス以テ無益ノ争端ヲ開ク原由ヲ除去スレハ其議案ヲ更改スル叮嚀
反覆徐ニ之ヲ裁酌シテ失當ノ虞ナキヲ得可ク而シテ斯ク此議院ヲ
ノ其自由ニ任スルヲ得セシムル者蓋シ議院ノ代議者ハ我佛蘭西全國
ノ民庶ニ代リ以テ國政ヲ議スル員タルカ故ニ重大ノ事務ハ必ス熟慮シ
テ之ヲ行フヲ要スルコ在ルナリ天レ議院ノ設ケ既ニ如此ト雖モ願
ミルコ又一ノ會議ヲ設ケ我佛蘭西國中富有材能勳功ノ德望至當ナ
ル者ヲ撰ミ之ヲ元老ノ職ニ任シ其員ニ充ツ可キカ故ニ今此ニ其要
ヲ舉ルコ凡ソ元老ハ往時ニ於ケル上議院ノ懼色戰栗以テ下議院ノ
商議ヲ聽キ常ニ其議定ノ說ニ和同ノ屏息與議セシカ如クナラシメ
ス蓋シ其職ハ憲法ヲ保護シテ其法ト並行ス可キ國民自主ノ權ヲ管

掌セシメ而シテ此大憲ニ據テ諸般ノ法律ヲ照查シ且新法ヲ制定シ
テ之ヲ行政官ニ附シ又議院會集ノ期外ニ生スル重大ノ難事ヲ理治
シテ憲法ノ文義ヲ釋明シ又其法ヲ行フニ緊要ノ諸事ヲ整備シテ其
法ニ脊反セシ命令ヲ廢止スル各般ノ權ヲ有セシメ以テ國家ノ大益
ヲ稽察シ法律ノ主腦タル條件ヲ施行スル貴重ノ任ニ置キ而シテ往
時裁判所ノ行フタル獨律不羈ニシテ國ヲ裨益シ法ヲ保護スルガ如
キ諸務ヲ管理セシメント欲ス然レ今此元老ハ敢テ往時ノ上議院ニ
於ケルカ如ク之ニ任スルニ審判ノ職ヲ以テセス最第一勸解者ノ分
ヲ有セシメ以テ居間ノ任ニ置ク者蓋シ若シ此官ヲ以テ罪犯檢治ノ
裁判所ト爲ス時ハ意フニ必ス衆忌ヲ來シ私意ヲ恣ニスル嫌ヲ受ケ
人民欽仰ノ意ヲ失フテ怨怒ヲ政府ニ傳フルノ資具タル譏ヲ招カシム
ルニ因レリ而シ元老會議ノ設ケ既ニ如此ト雖モ願ミルコ又大審院

ヲ置キ以テ政府ノ長ト國ノ安寧トニ對スル罪犯ヲ審判セシム可キ
 ノ要タルカ故ニ更ニ上等裁判官吏ノ中ニ就キ以テ撰擢セシ者ヲ其
 員ニ充テ且佛蘭西全國中各州會議ノ代理者ヲ擇テ其陪審ト爲ス
 欲ス凡ソ上ニ陳スル所ハ蓋シ憲法ノ大旨ニシテ其詳カナルハ更ニ
 裁定ス可シト雖モ嘗テ拿破崙帝ノ參議官ニ告諭セシ其言ニ曰ク夫
 レ憲法ハ時ニ應シ勢ヲ視テ漸ニ載酌ス可キニ在レハ宜シク後者ヲ
 シテ其改正ヲ得セシムル便地ヲ餘シ以テ寛ニ之カ制ヲ定ムヘシト
 故ニ今余カ制定セントスル此憲法モ亦唯其分明チ欠ク可カラサル
 條件ノミチ掲ケ敢テ我盛大ナル佛蘭西國民ノ運命ヲ羈勒限定セサ
 ル者是レ佛國若シ大患ノ生スルアラハ後人チシテ從來制定ノ法ヲ
 更改シ以テ國家ヲ安スル新法ヲ建テシム可キカ爲メナリ是以テ元
 老ハ政府ト共議シ以テ憲法ノ中特ニ其重大ナラサル條件ハ之ヲ更

改スルヲ得可シト雖モ今汝衆庶ト相議シ以テ決定セントスル此憲法
 ノ大基礎ヲ更ニ更改セント欲スル時ハ復々汝衆庶ノ許可ヲ得ルニ非
 サレハ敢テ更改ス可ラズ故ニ我カ佛蘭西ノ人民ハ常ニ其運命チ己ノ
 志願ニ從ヒ以テ自カラ定ムルヲ得可ク而シテ凡ソ憲法ノ基礎タル重
 大ノ事體ハ苟モ人民ノ意志如何チ問ハス以テ之ヲ制定ス可カラス
 夫レ此等ノ趣旨ハ汝衆庶ノ既ニ余カ之ヲ實際ニ施行スルヲ許セシ
 所タルカ故ニ余カ嘗テ希望スル如ク此憲法ニ因テ我佛蘭西國ニ靜
 謐隆盛ノ福ヲ與ヘ禍亂ヲ醸シ凶害ヲ生スル原因ヲ塞キ且汝衆庶ノ
 相共ニ余カ心ヲ竭シ治ヲ圖ノ意ヲ容受シ以テ永ク上天ノ惠ヲ享クル
 ヲ得ハ内外共ニ寧靜ニシテ余カ志ヲ達シ余カ職ニ於テモ亦成就ス可シ

○佛蘭西

一千八百五十二年

○千八百五十二年一月二十四日ノ憲法ヲ釋明シ且之ヲ更正スル千八百五十二年十二月二十五日ヨリ卅一日ニ至ル元老院決定書第十七條 千八百五十二年一月十四日ノ憲法ノ第二條第九條第十條第十五條第十六條第十七條第十八條第十九條第二十二條第三十七條ハ之ヲ廢ス

○佛蘭西 一千八百六十六年

○憲法及ヒ殊ニ其第四十條第四十一條ヲ更改シタル千八百六十六年七月十八日及ヒ二十二日ノ元老院決定書

第一條 憲法ハ元老院ニ於テ裁定シタル法式ヲ以テ討論ヲ爲スノ外他ノ官局ニ於テ之ヲ討論ス可カラズ
憲法ヲ更改シ又ハ釋明スル事ヲ目的ト爲タル願書ハ元老ノ五局中ノ三局以上ニ於テ其願書ヲ取調フ可キノ允許ヲ爲タル時ニ非シハ元老院ノ大會議ニ差出ス可カラズ

○英吉利

卷一 英皇帝ジョージノ大條約書「マグナカーター」○英帝ジョージノルマン家第十世ノ君ニテ千九百九十九年帝兄「リッヂヤルド」ノ早世ニ因リ帝位ヲ繼シ帝暗弱ニシテ無道ナリ外征ヲ好ミ屢外侮ヲ來ス國用不資諸侯人民大ニ苦ム終ニ諸侯合從シ帝ニ迫テ姦臣ヲ退ケ政府ノ弊害ヲ改正セント乞フ帝奔テ龍動ノ西二十里ヲテミ「ド」ト云所ニ至ル左右從フ者僅ニ數人ニ過キス帝撫然トシテ涙下ル諸侯ノ勢益熾ナリ帝始テ國民ノ皆離ル、ヲ知ル如何トモスル「ナ」ニ是ニ於テ大ニ諸侯人民ト誓テ國憲六十餘條ヲ定ム之ヲ大條約書ト云 以下略シテ帝在位十七年殂千二百十六年也○此大條約書ハ大半「ヘスリー」二世ノ時「サクソン」八民ニ約セシ國憲ニテ則「サクソン」王「エドワード」三世ノ國憲ニ復スト云蓋シ英人之ヲ以テ今日

國憲ノ基礎トシ仰キ尊フ一實ニ經典ノ如シ故ニ凡洋書及其翻譯書ヲ讀ム者ハ皆其名ヲ知ラサル無シ然レ其文ハ皆古キ羅天語ナレハ初學ノ生徒多ハ未タ其全文ヲ讀マス余嘗テ英國ノ「チツクス」フオードニ在リ時幸ニ其原文ヲ得佳師ニ就テ之ヲ解釋スルヲ得タリ今之ヲ和文ニ譯ス

卷二 帝「ジョン」殂太子「ヘスリー」立之ヲ「ヘスリー」三世トス「ヘスリー」亦暗弱シテ兵亂不逞數々先帝「ジョン」ノ大約書ヲ破リ侯伯士民數々帝ニ抵抗シ以テ更ニ大約書ヲ維持センヲ約ス之ヲ稱シテ堅固大約書ト云大約書ヲ掲載スル所ノ條約ヲ益堅固ニスルヲ謂フ凡「ヘスリー」三世ノ時大約書ヲ破リ復之ヲ堅固ニスルノ約ヲナス者前後六回「ヘスリー」三世千二百七十一年殂在位五十六年○帝「エドワード」一世「ヘスリー」三世ノ太子ニシテ父殂シ其位ヲ繼ク帝懿

達ニシテ頗ル豪邁ノ風アリ然レ功名ヲ貪リ數々外征ヲ事トス國用不資數々大約書ヲ破リ賦稅ヲ重クス侯伯人民之ヲ苦ム終ニ帝外征ノ隙ニ乘シ「ベヤルフ」ハ「ド」アル「侯」及「ノ」フ「ク」侯ノ兩人主トシテ義ヲ唱ヘ大ニ諸侯人民ヲ合從シ「ウエスト」ミ「コ」ストル「ノ」政事堂ニ會シ太子「エドワード」ニ因テ盟約ヲ立テ以テ大約書ヲ維持スルノ盟書ヲ作り使テ遣シ帝ニ之ヲ要ス帝如何トモスルヲナシ則之ヲ准允ス之ヲ堅固約書ト云蓋シ「ジョン」ノ大約書以來國憲緊要ノ定書トス于時千二百九十七年

卷五 「チャールズ」二世殂ス在位三十六年內十一年ハ逆臣其政權ヲ擅ニス○「ゼームス」三世佛蘭西ニ奔リ帝位ヲ退ク在位四年時「ゼームス」二世大ニ無道人民不服「チャールズ」一世ノ外孫荷蘭ノ「ナレンシ」王「ウ」ヰリヤム「大」兵ヲ率ヒテ英國ニ入ル侯伯人民「ナレンシ」王

心ヲ歸スル者多シ「ゼームス」二世其支ル能ハサルヲ知リ佛蘭西
ニ奔ル侯伯人民相共ニ「チレンシ」王并其妃「メレ」世ノ王女ニテ迎
テ英ノ國帝ト爲シ首ニ國憲ヲ維持セシメテ約ス之ヲ自由權利ノ
定書ト云

○獨逸

第七十八條 立法通常ノ方法ヲ以テ此國憲ノ改正ヲ爲スヲ得ヘ
シ然レ上院ニ於テ十四ノ投言ハ第六條 其改正ノ事ヲ拒ムルハ改
正ヲ爲スヲ得ヘカラス○聯盟各邦ノ一國ト帝國トノ關係ヨリ
生スル權利ニ付テ帝國國憲ノ種々ノ規則ハ其各邦ノ承認ヲ得ス
シテ改正スヘカラス

○普魯西

第七條 建國法ハ議院ノ通法ニ循ヒ修正スルヲ得之ヲ修正ス
ルヲ得之
ヲ變改スルヲ得然レモ亦必ス再次公評ヲ要ス但シ元
雜ヲ容レテ故ニ通法ニ循フト云○佛國ノ如キ那破嵩三世ノ時元
老ノ決定書ニ由ラザレハ建○各院必ス全勝ヲ要ス數ノ大半ヲ得
國法ヲ修正スルヲ得全勝ヲ得ス故少クハ二十一日ノ空間アル
而シテ再議ニ至ル者ハ再議ヲ要ス
ヲ要スハ尤モ慎重ヲ加フ

第一百十八條 若シ日耳曼同盟ニ因リ千八百四十九年五月二十六日
定タル憲法ノ爲ニ此建國法ノ改正ヲ要スルコト己ムヲ得サルニ出
ル時ハ國王之ヲ命スヘシ而シテ次會ニ於テ其旨ヲ兩院ニ通照ス
ヘシ日耳曼同盟ノ憲法ト此建國法○兩院ハ假コ命シタル改正ノ
果シテ日耳曼同盟建國法ト適合スルヲ決スヘシ

○澳地利

千九十四

第三篇第三十七條 千八百六十一年二月二十六日ノ帝國議會ノ憲

法ヲ修正シタル此憲法ハ國民ノ通權ニ關スル憲法篇第一 大政權并

ニ行政權篇第四 司法權篇第五 及帝國法院篇第六ノ設置ニ關スル憲法ト

同ノ即時ニ施行スヘシ

○米利堅

合衆國ノ人民等國中ニシテ益共和一定セシメ公明正大ノ法律ヲ立
テ國內ノ治平ヲ保テ外寇ニ備ヘ衆庶益安寧ナラシメ自主ノ幸ヲ我
々ノ子孫ニ固フセンコトヲ欲シテ此憲法ヲ亞米利加合衆國ノ爲ニ設
立スルモノナリ

第五條第一節一 兩院三分ノ二望ムモノアレハ常ニ此憲法ヲ補正

スルノ議ヲ發ス可シ又各州議政官三分ノ二之ヲ望マハ其補正ヲ
計ル爲メ集會ヲ起ス可シ而シテ議院ヨリ發スル所ノ議定ノ法ニ
從ヒ各州議政官ノ議四分ノ三或ハ集會ノ時四分ノ三協合セハ此
憲法ト共ニ立テ以テ合衆國ノ法ト爲ス可シ但一千八百年迄ハ第
一條九節ノ第一及第四條ニ關係スルコトヲ改革ス可カラス又其州
之ヲ肯セサレハ何レノ州タリモ上院ニ等シク議員ヲ出スノ權ヲ
奪フヘカラス

第七條第一節 此會議ヲ定ムルニ九州ノ議合ハサレハ此憲法ヲ立
テ合衆國ノ大法ト爲ス可カラス

○白耳義

第三百三十一條 立法權ハ建國法中某條ノ修正ヲ要スルコトヲ宣告スル

千九十五

ノ權ヲ有ス 國王及上下院 ○此宣告ノ後兩院即チ解散ス其令アル
ヲ待タス ○第七十一條ニ循ヒ兩院ノ新員ヲ徵聚スヘシ ○新徵ノ
兩院ハ國王ト通同シテ修正ノ條件ヲ議ス ○此時ニ各院少クモ其
議員三分ノ二出頭セサルキハ議事スルヲ得ス而シテ少クモ其
票三分ノ二ヲ合セサル時ハ變改ヲ許スヲ得ス 之ヲ慎重ス故ニ
議事特例ヲ用フ

○瑞典

第八十一款 現今行フ所ノ政体及其他王國ノ憲法ハ須ラク國王ト
議院兩局ト協議ノ上ニテ之ヲ改正廢止スルヲ要ス ○憲法ニ就テ
國王其意見ヲ述ヘ之ヲ議院ニ於テ評議スルヲアルキハ右決議ノ
趣ヲ國王ニ奏聞ス可シ其手續ハ名代人撰擧ノ法律中ニ掲載スル
カ如シ ○議院ノ決議ニ依テ憲法ノ案件ヲ出シ之ヲ允准スルキハ

右決議ノ趣ヲ國王ニ奏聞シ國王ハ議院ノ未ダ閉局セサル前ニ内
閣大臣總体ヲ召集シテ此事ヲ評議シ其意見ヲ聞タル上ニテ改廢
ニ出御シテ議院ヲ召シ之ヲ許可セル旨ヲ告知シ若シ然ラサルキ
ハ其許可シ難キ道理ヲ説明スヘシ

第八十二款 現今定ル所ノ手續ニ照シ議院ニ於テ憲法ヲ改正スル
ニ決定シ其上ニテ國王之ヲ許可シ或ハ元ト國王ヨリ發言シ其
上議院ニ於テ允准スル所ノ案件ハ總テ國中ノ憲法トシテ之ヲ施
行ス可シ

第八十三款 將來憲法ヲ解釋スルニハ當時ノ手續ヲ以テ之ヲ改正
シタル解義ヲ以テ証據ト爲シ其余ハ効用ナキモノトスヘシ

第八十四款 格段ノ案件出來スルキニハ憲法ノ字義ヲ援キテ決斷
ス可シ

第八十五款 憲法ハ現今ノ政体名代人撰舉王位相續及著書自由ノ法律ニシテ國王ト議院ト協議和同ノ上ニテ當時ノ政件ニ載スル所ノ條理ニ基キ決定設立セシ者ト看做スヘシ

○西班牙

附錄第一條 千八百四十五年五月二十日 二十三日ノ誤ナランニ公布シタル

西班牙國憲ヲ復興ス

第二條 國會ノ朕ト共ニ須要ナル例規ヲ定ルコ至ルマテハ左ニ掲ル増補律例ニ依リ國憲ヲ修正ス可シ但該増補律例ハ此王勅ヲ公布シタル日ヨリ該國憲ノ部ニ列スル者ト爲テ之ヲ遵守執行ス可シ

千八百五十六年九月十五日王宮ニ於テ決定ス

女王手カラ署名ス イサベル

執政會議長

レオポートル、オドリル

○瑞士

第一百一條 聯邦國憲ハ何時コテモ查正スルヲ得

第一百十二條 國憲ノ查正ハ聯邦ノ法律ニ因リテ定タル法式ニ從フ

第一百十三條 聯邦議會ノ一局ハ聯邦國憲ノ查正ヲ主張スレヒ他ノ

一局之ニ同意セサル時若クハ投票ノ權ヲ有スル瑞士國民五萬人

以上國憲ノ查正ヲ請求シタル時ハ瑞士國民ニ投票セシメテ以

テ查正ノ可否ヲ決ス可シ○右場合ニ於テ國民投票ノ查正ヲ可ト

決スル者多數ナル時ハ國議會及列邦議會ヲ更選ノ國憲查正ニ從

事セシム可シ

第四百十四條 查正シタル聯邦國權ハ投票ニ參スル瑞士國民ノ多數及列邦ノ多數之ヲ許認スルニ及ンテ乃チ執行ス

○葡萄牙

葡萄牙及アルガルブ王國國憲 ナーペドロ第一世千八百二十六年四月二十九日之ヲ宣布シ千八百五十二年七月五日増補法律例ニ因リ修正ス原註ニ云ク増補法律例ノ各條ハ其相干渉スル建國法ノ各條下ニ分チ掲タリ而シテ増補法律例ノ條款ニ由リ建國法ノ條款ヲ全廢スル者ハ直ニ建國法ノ本文ニ増補法律例ノ條款ノ成文ヲ代填ス若シ増補法律例ノ條款ニ存置シテ修正スル者ハ建國法ノ條款ニ註記セリ

第四百十條 王國ノ建國法ヲ誓約タル日ヨリ四年ノ後ニ建國法中ノ條目ヲ修正スヘキヲ認ムルキハ文書ヲ作テ之ヲ起議スヘシ

但該起議ハ代議士院ニ於テ稿ヲ起シ同院ノ總議員三分ノ一之ヲ主張スヘシ

第四百十一條 前條ノ起議ハ各展讀會毎ニ六日ヲ隔テ三回之ヲ讀了スヘシ而シテ第三展讀ノ後代議士院ハ法律制定ノ爲ニ定ル例

ニ依據シ該起議ヲ討論ニ附スルヲ得ヘキヤ否ヲ論決スヘシ

第四百十二條 起議ヲ討論ニ附シテ建國法ノ條目修正ヲ須要トスルヲ認ムルキハ次ノ議員任期ニ於テ今起議シタル建國法ノ改竄若クハ改正ノ特任ヲ授ルヲ議員撰舉人ノ命令スヘキ法律ヲ作ルヘシ但該法律ハ通常ノ規程ニ準シ國王之ヲ制可公布スヘシ

第四百十三條 次ノ議員任期ノ第一會期ニ於テ起議ヲ決議ニ付ス

～シ但建國法ノ改易若クハ増補ヲ許認スルキハ建國法ニ改竄ヲ加ヘテ端正ニ之ヲ公布スヘシ

第四百四十四條 大權ノ權域并ニ職掌ニ係リ及國民各個ノ權理ニ應當スル者ノ外ハ建國法トセス凡建國法ニ戻レル件ハ前數條ニ揭タル諸規式ヲ賤履セサルモ通常議員任期ニ因テ之ヲ取消スヲ得現任ノ議員直ニ自ラ非建國法ノ得條款ヲ取消スル權ヲ有スルナリ

○荷蘭

第九十六條 凡建國法修正ノ議按ハ其起議スル修正ノ箇條ヲ明書ス法律ハ其論決スル所ニ隨ヒ該議按ヲ討議スヘキヲ宣告ス
次ニ揭示セルカ如ク建國法ヲ修正スル時ハ現在ノ國會ハ散スヘキニ依リ其前ニ此法律ヲ出スナリ
第九十七條 此法律ヲ公布スルノ後國會ノ兩院ハ解散ス○新ニ

選舉シタル兩院ハ此議按ヲ討議ス然ヒ少クモ投票三分ノ二ヲ集ルニ非レハ該法律ニ因リテ起議シタル建國法ノ修正ヲ許認スルヲ得ス

第九十八條 攝政官政ヲ握ル時ニ際シテハモ建國法若クハ繼嗣序次ノ變改ヲ議スルヲ得ス

第九十九條 國王及國會ノ諧合決定シタル建國法ノ修正ハ端式ニ循ヒ公布シテ建國法ニ附添ス

○丁抹

第九十五條 此國憲ニ付キ將來増加ス可キ種々ノ改正則按ハ議院ノ通常及格別ノ集會ニ於テ之ヲ爲リヲ得可シ○此國憲ノ新ナル例規ニ付テノ則按ハ兩院ニ於テ之カ決定ヲナシ而シテ政府之ニ

効力ヲ與ヘント欲スル時ハ直ニ兩院ヲ解散シ更ニ下院及上院ノ爲ニ全國ヨリ議員ヲ撰擧ス右撰擧セラレタル兩院ノ議員ハ通常及特別ナル集會ニ於テ其卿按ヲ更ニ決定シ國王ノ批可ヲ得ル時ハ其卿按ハ法律ノ力ヲ有ス

第十六 附録

○佛蘭西 一千七百九十五年

第三百七十二條 佛蘭西國ノ紀元ハ共和政事初立ノ日ヨリ千七百九十二年九月二十二日ヨリ算スヘシ

○佛蘭西 一千八百一十四年

第六十八條 民法及此建國法ニ反對セサル都テノ現今法律ハ他ノ法律ヲ以テ之ヲ變改スルマテハ續テ之ヲ行フヘシ

○佛蘭西 一千八百三十年

第六十六條 此建國法并ニ之ニ確定シタル都テ權利ノ保存ハ報國兵并ニ都テノ佛蘭西國民ニ之ヲ任スルナリ

第五十九條 民法及此建國法ニ反對セサル都テノ法律ハ他ノ法律ヲ以テ之ヲ變改スルマテ續テ之ヲ行フヘシ

○佛蘭西 一千八百四十八年

第九條 「アルゼリア」亞非利加ニ在并ニ屬國ノ領地ハ佛蘭西ノ領地ニシテ退テ此建國法ヲ之ニ該用スル爲メ格段ノ法律ヲ發スルマテハ格別ノ法律ニ從フヘシ

第十二條 此建國法ニ牴觸セサル處ノ五法并ニ現在ノ法律規則等ノ條々ハ法律ニ從ヒ之ヲ改正スルマテハ續テ之ヲ行フヘシ
第十三條 現在ノ法律ニヨリ職役ヲ任シタル所ノ總テノ官員ハ其ニ關スル編制事務章程ノ新法ヲ頒布スル迄ハ續テ勤ヘシ

○佛蘭西 一千八百五十二年

第十四條 宰相、元老院、議院、參議官ノ官員及ヒ海陸軍ノ士官、裁判役其他ノ官員ハ左ノ誓詞ヲ述フ可シ
余ハ憲法ヲ遵守シテ大統領ニ忠節ヲ盡スヲ誓フ

第五十六條 現今行ハル、所ノ諸般ノ法律及規則ノ憲法ニ違反セサル箇條ハ日後特ニ之ヲ更改スルノ命アルニ至ル迄施行ス可シ
第五十八條 此憲法ハ之ヲ以テ制定シタル國ノ大局ヲ設置セシ日ヨリ施行ス可シ

十二月二日ヨリ此憲法ヲ施行スル日ニ至ル迄ノ時間ニ共和政治ノ大統領ヨリ下シタル命令ハ皆之ヲ法律ノ力アリトス

○佛蘭西 一千八百五十二年

千百八

第九十三條 千八百五十二年三月二十二日附ノ布告ハ之ヲ廢ス

○憲法ヲ改正スル千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書○
元老院憲法第三十一條及第三十二條ニ循ヒ商議ヲ爲シテ左ノ
條件ヲ決定セリ

第七條 千八百五十二年一月十四日ノ憲法ノ箇條中ニテ此決定書
ニ背カサル條件ハ舊ニ依テ之ヲ施行シ其憲法ニ定メタル方法ト
體裁トニ非サレハ之ヲ更改ス可カラズ

○千八百五十二年一月十四日ノ憲法ヲ釋明シ且之ヲ更改スル千
八百五十二年十二月二十五日ヨリ三十一日ニ至ル元老院決定
書

第十六條 憲法第十四條ニ定メタル誓詞ハ左ノ如クナリトス

余ハ憲法ヲ遵守シ皇帝ニ忠節ヲ盡スヲ誓フ

○英吉利

卷一第六十一條 此ニ天神ヲ尊敬シ國體ヲ整理シ以テ國家ノ安穩
ヲ復セン爲メ已ニ上ニ掲タル條々ヲ准允シ且之ヲ萬世不窮ニ傳
ヘテ確乎トシテ動カサランヲ欲ス故ニ之ヲ保守セン爲ニ其權
利ヲ汝有衆ニ許可准允スルヲ左ノ如シ

一 此帝國ノ諸侯伯ノ内ヨリ二十五人ヲ撰舉シ之ヲシテ常ニ其
勢力ヲ以テ太平ヲ維持シ朕カ今准許シタル自由ノ權利ヲ固有
セシムヘシ若シ朕如クハ大審判官長或ハ諸臣或ハ縣官此條約
ヲ破ル犯罪ヲ有二十五侯ノ内少クモ四人ノ前ニ訴出ル者アル
トハ此四人直ニ朕ノ前ニ其愁訴ヲ露出シ直ニ之ヲ救助シ又改

千百九

正セシテ請フヘシ而シ若シ朕又大審判官長之ヲ聞キ夫ヨリ
 四十日間ニ此疾苦ヲ救助シ又改正セシムハ此四人又之ヲ共同
 列二十五侯共ニ評議シ廿五侯一般人民ト共ニ協力百方勢威ヲ
 以テ朕ヲ壓制窘迫スヘシ或ハ城壁ニ據リ或ハ土地及家財ヲ視
 奪抑留シ以テ其疾苦ヲ救除シ弊害ヲ改正セシテ脅要スヘシ
 但決シテ朕カ身體并ニ皇后皇子ノ身體ヲ汚辱スヘカラス而シ
 テ朕若シ其疾苦弊害ヲ救除改正セハ諸侯人民忽チ朕ノ命令ニ
 從ヒ忠誠ナルヲ舊ノ如クナルヘシ

一 凡二十五條此權利ヲ施行スルニ當リ其命令ニ從ヒ之ヲ助成
 セント欲スル者ハ預メ二十五侯ニ其誓詞ヲ爲ヘシ朕之ヲ禁セ
 ス

一 凡二十五侯ノ命令ニ從ヒ協力勢威ヲ以テ朕ヲ壓制脅要セン

トテ預メ二十五侯ニ誓言スルヲ好サル者アラハ朕之ニ勅シテ
 其誓言ヲ爲サシムヘシ

一 凡二十五侯ノ内病死或ハ他ノ事故ニヨリテ欠員アラハ其餘
 ノ侯伯評議ノ上他ノ侯伯ヲ撰舉シ其欠員ヲ補フヘシ

一 凡二十五侯悉ク集會シ又其内不參ノ者アリト雖此集會ニ
 テ上ノ條件ヲシ施行スルニ當リ諸侯中異議區々ニシテ統一ナ
 ラサルキハ其可否ノ多寡ヲ定メ其多方ニ決シ之ヲ以テ号令ヲ
 布クキハ二十五侯悉ク同意センモノト看做スヘシ

一 凡二十五侯ハ其勢力ノアラン限リテ以テ上ニ掲ル條件ヲ固
 守シ誠實無二ナルヲ誓言スヘシ

一 凡ソ此ノ條約ハ將來ニ於テ一箇條ニテモ決シテ廢止スヘカ
 ラス若シ萬一朕カ爲ニ之ヲ廢止スル者アリハ其廢止ノ約ハ全

ク虚無ニ歸シ未タ嘗テ廢止セサル者ノ如クナルヘシ

第六十二條 凡怨讎惡行等忌諱ニ觸ル、者アリヒ此般ノ爭論ヨリ起リシモノハ悉ク之ヲ寬免スヘシ加之朕在位十三年「イヌ」^四月^初ヨリ以來平穩回復ノ日マテ凡ソ爭論中其事ニ付罪ヲ犯セシ者ハ悉ク大赦ノ典ニ處スヘシ故ニ此證書ヲ汝等ニ分付ス

第六十三條 是ニ於テ朕確乎トシテ汝有衆ニ命ス英國ノ聖會ハ自由ノ權利ヲ有シ朕カ族屬人民ハ何事ニ限ラス何レノ處ヲ問ハス此條約ニ掲ル所ノ准允并ニ自由ノ權利等悉ク之ヲ安堵ニ保守シ子孫萬世ニ傳ヘテ更ニ疑ヒアルヘカラス○現在朕ハ天下ノ諸侯伯ト共ニ天神ニ誓テ此條約少シモ違背ナク誠實信義ヲ以テ堅ク相守ルヘシ「フチーミード」ノ牧畜場ニ於テ諸侯伯并ニ一般人民ノ面前ニ於テ公然朕自ラ名ヲ鈴シテ以テ之ヲ付與ス○爾時在位十

七年六月十五日

卷二 此約書ハ朕カ手書玉璽ヲ副テ之ヲ森林官州官及四方ノ有司全國郡村ニ分付シ各地方ニ於テ之ヲ人民ニ頒布シ且告諭セシメテ曰此約書ハ朕自ラ確定シテ長ク國憲ト爲ス凡審判官州官邑正^{メヤール}及宰臣等必此國憲ニ依據セサルヲ得ス故ニ人民ハ裁判所ニ於テ^{ミニストル}此國憲ヲ主張スルヲ得ヘシ

第二條 凡審判官又宰臣此約書ノ箇條ニ背キ裁判ヲ爲スルハ忽チ之ヲ廢止シ其處斷ハ嘗テ効無キ者ト看做スヘシ
第三條 此約書ニ朕カ手書玉璽ヲ副ヘ全國ノ本寺并ニ一切ノ寺院^{カシヤレ}ニ分附シ各所ニ之ヲ藏テ毎年二回人民參集ノ時之ヲ讀上ケシムヘシ

第四條 凡此約書ノ箇條ヲ破リ又破ント謀リ又之ニ抗抵スルノ語

チ爲ス者等ハ大僧正僧正聖會放逐ノ罰法ヲ以テ其ヲ呢誼スヘシ
 ○此罰法ハ毎年二回公然鳴誼シ以テ之ヲ天下ニ公布スヘシ○若
 シ僧正此鳴誼ヲ爲サヌ又之ヲ爲ニ寛ナルキハ大僧正權力ヲ以テ
 其僧正ヲシテ其職分ヲ盡スヲ前文ノ如クナラシムヘシ○聖會放逐
 ノ罰トハ宗旨ノ罰ニテ凡此罰ニ當ル者ハ耶蘇ノ縁絶ヘ未來ノ樂
 土ニ趣キ道無キ者ト見做ス中古文學未開人民之ニ惑フ親友ト雖
 此罰ニ當ル者ト共ニ齒セス水火糧食ヲ給與セサルニ至ル故人
 民之ヲ恐ル、ト眞ニ神ノ冥罰ヲ得タルカ如シ

卷五第二章 前條ニ云フ所ノ貴族僧俗及人民ノ名代人「ウエストミ
 ニストル」ニ會同シ評決スルヲ左ノ如シ
 此ニ貴族人民ヲレノシ「王妃兩殿下」此契約ヲ許諾アラソクテ請
 願ス

第三章 凡從來忠義至尊ノ誓詞ヲ爲スヘキ者ハ悉ク左ノ誓詞ヲ爲
 スヘシ而シテ古例忠義至尊ノ誠詞ハ悉ク之ヲ廢スヘシ
 皇帝「ウカリヤム」皇后「メレ」兩陛下ニ對シ何某忠誠無二ノ義務ヲ
 盡サンコトヲ誓ヒ之ヲ眞正ニ契約ス

冀クハ神ノ我ヲ監保アラソクテ
 世上嘗テ云フ所ノ羅馬法王ノ權利ヲ以テ帝王ヲ聖會放逐シ又之
 ヲ廢立シ又其臣屬ヲシテ之ヲ弑セシムル等ノ宗旨ハ何某之ヲ邪
 宗異端トシテ憎惡厭忌シ誓テ之ト絶ツヘシ○我今誓言ス凡外國
 帝王又僧侶等ハ此帝國内ニ於テ宗旨裁判ノ權利及其餘ノ權利威
 光等決シテ有ルヘカラス

第五 章 是ニ於テ貴族僧俗并ニ人民已ニ巴里門ノ兩局タリ而シテ

兩陛下之ヲ以テ其儘巴里門ノ會同ト爲シ以テ將來國宗國法及自由權利等ヲ維持セシメテ圖ル

卷六 凡兩議院ニ於テ罪狀ヲ鳴告セラレタル大臣ハ帝王恩赦ノ特典ニ與ルヲ得ス○以上八箇條ノ内終リノ二箇條ハ國憲ヲ維持スルニ最モ緊要ノ法トス○兩議院ニ於テ罪狀ヲ鳴告スルノ法トハ英國ニテ大臣或ハ不法惡行アリテ人民其弊害ヲ受ルヲ甚シト雖モ尋常裁判所ニ於テ之ヲ罪スルノ法ナキモハ兩議院ニ於テ其罪ヲ議シ衆論ノ決スル所ヲ以テ王ニ奏陳ス王之罪ヲサレタル得ス尤其罰ニ輕重アリ輕キ者ハ免職ニ止リ其次ハ家財沒收又海外謫流最モ重キ者ハ死刑ニ處セラレ之ヲ英語ニテ「インローチメント」ト云英ノ國憲ニテハ最モ緊要ノ者トス如何トナレハ凡大臣タル者ハ其委任重キ故ニ或ハ陰ニ匪法ヲ以テ己ヲ利スルモ姦曲ヲ廻

シ陽ニ之ヲ彌縫スルモハ假令尋常裁判所ニ於テ之ヲ糾彈スト雖モ法ノ以テ之ニ中ツヘキ者ナシ然レモ一般人民其害ヲ受ルヲ最モ甚シ尋常竊盜強盜等ノ一時數人ヲ損害スル如キ比ニアラヌ故ニ國憲ト謂フ者殊ニ大臣ノ橫行ヲ預防スルヲ以テ第一トス英國已ニ此法ヲ得タリ宜哉各國ノ之ヲ稱譽スルヲ而シテ各國モ漸次此法ニ效フト云

○獨逸

第十一篇追加 此第十一篇ニ記載シタル種々ノ規則ハ「ハビエール」ニ於テ千八百七十年十一月二十三日ノ同盟條約第三篇第五條ノ規定ニ循フテ施行スヘシ「ウイルテンベルグ」ニ於テ千八百七十年十一月二十一日ノ陸軍ニ關シタル條約ノ規定ニ循フテ此等ヲ施行

○普魯西

第六條 法ニ示シタル規式ニ循テ公布シタルハ國民認知スルニ由シ諸法章及王命ハ人民必由ノ務トナル國民ハ法ヲ天トス○法ニ循ヒ公布シタル王命ノ法トスヘキカ否ヤノ檢査ハ部官ニ屬セスシテ兩院ニ屬ス王命法章ニ讓ルト一

第八條 兩院ノ議員及凡政府ノ官吏ハ國王ニ向テ忠順ノ誓ヲ宣ヘ及建國法ヲ中心確守スルヲ誓フ○軍兵建國法ニ誓ヲ宣ヘス獨リ王ニ誓ヲ宣フルヲ云兵ハ王ニ忠ナルヲ知ル政事如何ト問ハス

第九條 此建國法ニ乖カサル所ノ定法書及各法及王命一切ノ條規其別法ニ由テ之ヲ廢セサル者ハ之ヲ存シテ舊ニ因ル

第十條 舊法ニ由テ建設シタル諸官ハ官制法公布ノ日ニ至ル迄施行舊ニ因ル

第十二條 第二十六條ニ掲タル法章教學法公布ノ日ニ至ルマテ現行ノ小學校及ヒ普通學ノ法則ハ舊ニ因ツテ施行スヘシ教學新法未ダ議決セズ猶舊法ニ因ルト云

第十三條 刑法改定ニ至ルマテ筆記印刻繪畫ノ犯罪ニ付別法ヲ付スヘシ

第十四條 千八百五十六年四月十四日ノ法ニ於テ廢ス

第十五條 第七十二條ニ掲タル民選法ノ公布ニ至ルマテ下院議員ノ撰舉ニ付キ千八百四十九年三月三十日ノ王命ハ舊ニ因テ施行ス

第十七條 官吏法ノ中ニ於テ建國法公布以前施行セル所ノ官吏

ノ權利ハ特ニ之ヲ存スヘシ

第一百十九條 第五十四條ニ載タル國王及兩院議員及政府官吏ノ宣誓ハ此建國法ノ立法官ニ因テ鈴定シ即時ニ行フヘシ

○米利堅

第六條第一節 此憲法ヲ立ル前ニ「各州聯合ノ時結フ所ノ約定及國債等」ハ都テ此後ト雖モ保存スヘシ

第二節 此憲法及此憲法ヲ追テ定ヘキ合衆國ノ法度又合衆國ノ命ヲ以テ既已ニ結フ所ノ條約或ハ將來結ヘキ條約等都テ國中ノ大法タルヘシ而シテ其州ノ法度憲法之ニ乖戾スルコトアルモ各州ノ裁判役之ヲ遵守セサルヲ得ス

第三節 上ニ記載スル上下兩院ノ議員及各州議政官又合衆國及各

州ノ行政官并ニ執法官皆誓テ此憲法ヲ維持セシムルハアルヘカラス然レ合衆國中何等ノ官職ヲ奉スルモ宗法ノ誓ヲ用ルニ及ハス

○白耳義

第一百三十八條 建國法施行ノ日ヨリ始メ建國法ニ反シタル一切ノ法章王命指令條例及其它ノ文書ハ之ヲ廢ス

○西班牙

第七十九條 海外ノ屬州ハ別法之ヲ統治ス

○荷蘭

附錄第一條 凡現今設立スル官廳ハ此國憲法ニ準シ之ニ代置スル

官廳ヲ新設スルノ日ニ至ルマテ皆其權任ヲ保有ス

第二條 法律ハ建國法査正ノ故ヲ以テ終身官ノ職ヲ失タル者ニ給與スヘキ償金ヲ定ム

第三條 凡建國法修正ヲ公布セシキニ於テ執行ノ力ヲ有スル法律條例及布令ハ法ニ循ヒ之ヲ廢止スルノ日ニ至ル迄現地ニ施行ス

第四條 應撰人ノ推薦若クハ官吏叙任ニ關シ藩主權ノ特權ヲ廢止ス其他ノ藩主權ヲ廢止シ及其權ヲ廢スルニ因テ給與スヘキ償

金ハ法律ニ由リ命令規定スルヲ得

第五條 左ノ二項ニ關スル法接ハ建國法修正ヲ公布スル後國會ノ

第一會期ニ下附ス

第一 撰擧法及上下院ノ代議士ノ撰任ニ關スル法律

第二 州法及邑法

執政官ノ責任司法官ノ新設教育施濟ノ管理及集會結社ノ權ヲ受用スル法接ハ成ルヘク前文ニ掲ル會期ニ下附スヘシ但遲クモ其次ノ會期ニ下附スヘシ○歐洲外ニ於ル王國藩屬地及所屬地ノ管理ヲ定ムル法律ハ建國法ノ修正ヲ公布スルヨリ三年内ニ起議スヘシ

第六條 國會ノ上院議員三分之一ノ第一回更撰ハ千八百五十一年九月第三ノ月曜日ニ於テ下院議員半數ノ第一回更撰ハ千八百五十年九月第三ノ月曜日ニ於テスヘシ○議員更撰ハ第五條第一項ニ掲ル法律ニ因リ定タル順次ニ準シテ之レヲ施行スヘシ

○丁抹

丁抹ノ國憲ハ一千八百六十五年十一月七日兩院ニ於テ決定シ一千

八百六十五年十一月七日

八百六十六年七月二十八日國王ノ許可ヲ得タル者ナリ

千百二十四

○伊太利

第八十一條 此國憲ニ牴觸スル法律ハ之ヲ廢ス

第八十二條 此國憲ハ兩院集會ノ初日ヨリ其力ヲ有ス兩院ノ集會

ハ議員撰擧ノ整理スルヤ否直ニ之ヲ行フヘシ若シ集會マテノ間

ニ於テ現行ノ法式ニ付キ緊急ナル時機アルハ國王ハ各種ノ規

則ヲ假設スルノ權ヲ有ス裁判所ニ於テ批定及簿冊ニ記入スル方

法ハ國憲布告ノ日ヨリ之ヲ廢ス

第八十三條 國王ハ此國憲ヲ施行スル爲ニ緊要ナル出版及撰擧或

ハ邑兵又參議官ニ關スル法律ヲ制定スルノ權ヲ有ス未ダ出版ノ

法律ヲ布告セサル内ハ尙現行ノ規則ニ由ル

第八十四條 此假則ヲ施行及遵守セシムルハ執政其責ニ任ス

千百二十五

第十七 雜纂

第一 教育

○佛蘭西 一千七百九十一年

第二百九十六條 共和國中初學校ヲ設ケ其生徒ニ讀書習字數術及道學ノ元由ヲ教ユヘシ共和政府ニ於テ其學校教頭ノ住居ノ雜費ヲ供備スヘシ

第二百九十七條 共和國内ニ初學校ヨリ上等ノ學校ヲ設クヘシ且二州ニ付キ少クハ一個宛ノ割合ヲ以テ其全數ヲ定ムヘシ

第二百九十八條 共和國ノ全領ニ學院一個ヲ設ケ右ハ都テノ新發明ヲ取リ集メ學術ヲ大成スルヲ擔當スヘシ

第二百九十九條 佛蘭西國ノ諸學校ハ相互ニ上下ナキ者ニシテ互ニ支配上ノ往復ヲ爲ニ及ハス

第三百條 國民ハ隨意ニ教育及學問ノ爲メ私ノ建造所ヲ設立スルヲ得又學文術ノ進歩ニ參加スルニ於テハ自由ニ會議ヲ成ヌヲ得ヘシ

○佛蘭西 一千七百九十九年

第八十八條 學院一箇所ヲ設立シテ新發明ノ事物ヲ集合シ及學術ヲ進ルヲ之ニ委託スヘシ

○瑞士

第二十二條 聯邦ハ瑞士大學校及技術學校ヲ設立スルノ權ヲ有ス

第二 國祭

○佛蘭西 一千七百九十五年

第三百一條 國民ノ交リ兄弟ト同一ナルヲ守ラシメ及國民ヲシテ建國法國家及法律ヲ敬慕セシムルカ爲メ國祭ヲ興行スヘシ

第三 度量

○佛蘭西 一千七百九十五年

第三百七十一條 共和國ニ於テ度量ノ方法ハ同一ナルヘシ

○英吉利

卷一第三十五條 凡度量衡ハ帝國中一般ナルヘシ葡萄酒ノ量法一五穀ノ量法一麥酒ノ量法一染色劑ノ度一秤衡モ亦之ニ准スヘシ

第四 國旗

○佛蘭西 一千八百三十年

第六十七條 今般佛蘭西ハ己ノ古來ノ旗色ヲ復用スルニ由テ以後三色印ノ外他ノ印ヲ衣服ニ付スヘカラス

○伊太利

第七十七條 國旗ヲ保ス全國民ノ帽印ハ藍色ヲ用ユ

第五 國語

○瑞士

第九條 瑞士國ニ使用スル日耳曼佛蘭西伊太利ノ三語ハ聯邦ノ國語トス

第六 鐵道

○獨逸

第四十一條 獨逸帝國保護ノ爲又一般必通ノ爲必要ト思考スル鐵道ハ其領分ヲ通スル所ノ各國ニテ之ヲ拒ムト雖其各國ノ國君權ヲ害フコト非レハ帝國ノ法律ノ効力ヲ以テシ或ハ帝國ノ入費ヲ以テシ或ハ免許ヲ請負人ニ與ヘテ之ヲ造築スルヲ得ヘシ右鐵道ニ付テハ同キ法律ノ効力ヲ以テ「エクスプロアリエシヨ」ノ權鐵道ヲ民有地ニ造築セントスルキハ評價人ヲシテ地價ヲ積チ與フルヲ得ヘシ○現立シタル鐵道會社ハ其鐵道ニ新築鐵道ノ接續ヲ拒ムヲ得ス然レ其接續ニ關スル費額ハ總テ新築者ヨリ之ヲ支償スヘシ○新築スヘキ并ノ鐵道或ハ其他競爭ノヲ付

キ妨止ノ權ヲ從前ノ鐵道會社ニ與ヘタル法律ノ規定ハ帝國中ニ廢ス然レ既得ノ權ハ尙舊ニ依ルヘシ且將來鐵道會社ノ免許ニ於テモ亦此ノ如ク妨止ノ權アルコトヲ得ス

第四十二條 聯邦各國ノ政府ハ一般往來ノ爲メニ同形ナル網羅狀ヲシテ獨逸鐵道ヲ管理スヘキ約束ヲ立ツヘシ故ニ聯邦各國ニ於テ新築ノ鐵道ハ同一ノ定式ニ據テ之ヲ造リ及器械ヲ備フヘシ

第四十三條 前條ニ據リ成ヘキ迅速ニ同一ナル普通ノ方略及器械ヲ用ヒ同一ナル取締規則ヲ施行スルヲ要ス獨逸全國ノ鐵道修繕ハ人民ノ危險ヲ防護シ又其方略及器械類ノ構造ヲ全備セシムルヲ付キ獨逸帝國ハ一切ノ鐵道ヲ監督スルノ權ヲ有ス

第四十四條 獨逸ノ各鐵道會社ハ聯邦各國ヲ通行スヘキ往來ノ爲ニシ及其會社ハ互ニ相整齊シタル時刻表ヲ製スル爲ニ充分ノ速

方アル乗客列車并ニ貨物ヲ輸送スル爲ニ緊要ナル載貨列車ヲ設
備シ且各鐵道會社ハ乗客及貨物ヲ輸送スル爲ニ直走スヘキ列車
ヲ備ヘ而シテ又相當シタル賃銀ヲ得テ一ノ鐵道ヨリ他ノ鐵道ニ
輸送スヘキ方略ヲ整備スヘシ

第四十五條 帝國ハ鐵道ノ賃銀表ニ付テ監督ノ權ヲ有ス此監督權

ニ由テ政府ノ管理スヘキトハ左ノ二件トス

第一 成ヘキ丈迅速ニ獨逸ノ鐵道ハ同一ノ規則ヲ用ユヘキ事

第二 賃銀表ハ成ヘキ丈均一ニシテ且低價ナルヲ要ス特ニ石炭
及半燒石炭及薪木鑛物石材食鹽鐵材糞料等ノ諸物ニ於テ農作
及製造ノ要用ニ適宜ナル賃銀表ヲ用ヒ成ルヘクナレハ「アイン
プエンニグタリ」アインプエンニグタリ「鐵道一里毎ニ目方百斤ニ「ブエンニグ」
賃銀ヲ謂フニ「ブエンニグ」ハ凡我ニ厘ニ當
ルヲ用ユヘキ事

第四十六條 急變ノ時特ニ飢歲ノ場合ニ於テハ各鐵道會社ハ穀物

粉類豆類及馬鈴諸等ニ付テ上院ノ管轄シタル委員第八條第五鐵
道郵便電信ニ

關スノ發議ニ由リ皇帝ヨリ定ヘキ當時ノ必要ニ相當シタ格別ナ

ル低價ノ賃銀表ヲ設ヘシ然レ其賃銀表ハ此國憲ノ第四十五條ノ

第二項ニ記載スル所ノ諸物ニ付テノ賃銀表ヨリ低下ナル可ラス

○右ノ規定并ニ第四十二條ヨリ第四十五條ニ至ルマテニ掲載シ

タル條則ハ「ハビエール」ニ於テ之ヲ用ユヘカラス○然レ「ハビエー

ル」ニ對シ獨逸國ヲ保護スル爲ニ鐵道ヲ築キ及其要具ヲ備ルニ付

テノ同一ナル規定ヲ用ユヘキト議院ノ決定ニ由テ命令スルノ

權ハ帝國ニ在リトス

第四十七條 獨逸國ヲ保護スル爲ニ獨逸全國ニ於テ鐵道ヲ使用ス

ルトニ付テ帝國政府ノ求ハ各鐵道會社之ヲ拒マスマテ承諾スヘ

ヲ特ニ兵隊及軍用品ハ適宜ノ賃銀ヲ得テ輸送スヘシ

第七 電信

○獨逸

第四十八條 凡郵便及電信ノコトハ獨逸帝國中諸國ノ交際ノ爲ニ同形ナル設立トシテ之ヲ整頓シ及之ヲ管スヘキ者トス○第四條ニ記載スル所ノ郵便及電信ノコトニ關スル帝國ノ立法ハ北獨逸聯邦ノ郵便局及電信局ニ施行シタル規則及右ニ關スル行政ノ規定ニ付テ之ヲ用ユヘカラス

第八 郵便

○逸獨

第五十條 皇帝ハ郵便局及電信局ヲ指揮スル最上權アリ皇帝ヨリ各官署ノ官吏等ハ郵便局及電信局ノ管理及施行ノ方法ニ於テモ又該局ノ官吏等ノ適任ニ於テモ全國中同形ナラシムルハ其人等ノ義務及權利ナリトス○皇帝ハ該規則及行政ノ規定ヲ設ルノ權ヲ有シ又外國ノ郵便局及電信局トノ交通ヲ專ラ整理スルノ權アリ○郵便局及電信局ノ官吏ハ必ス皇帝ノ命令ニ遵フヘシ此義務ハ該官吏等ノ宣誓中ニ在ル者ナリ○郵便及電信ノ各局ニ於テ上等ノ官吏(原註)頭取及評議官及第一等検査官(原註)謂フ等ヲ任命シ及各邦ニ於テ郵便局及電信局ヨリ任セラレタル監督官(原註)インスペクトル及監督官(原註)トローレルヲ命スルコトハ皇帝ヨリ帝國一般ニ向テ爲スヘキ者トス右官吏等ハ皇帝ニ對シテ職務ニ付テノ誓詞ヲ宣フヘシ聯盟各邦ノ政府ノ承任ヲ得又其布告ヲナサシムル爲ニ右官吏等ヲ命セタルコトニ付

テ其關係シタル國ノ政府ニ速ニ通知スヘシ○郵便局及電信局ニ在ル所ノ各官吏等并ニ郵便及電信ノ種々ノ事務ヲ管理スル官吏等ハ其關係シタル聯盟各邦ヨリ任命スヘキ者ナリ○獨立シタル郵便局及電信局ノナキ聯盟各邦ニ於テハ其郵便及電信一切ノ事件ハ現ニ成立ツ所ノ種々ノ條規ニ循フヘシ

第五十二條 第四十八條ヨリ第五十一條ノ四箇條ニ記シタル種々ノ規定バビエール及ヒ「ウイルトンベルグ」ニ於テ之ヲ用ユヘカラス其代トシテ右二箇國ニ於テ用ユヘキ規則ハ左ノ如シ○郵便局及電信局種々ノ特權ニ付キ又郵便及電信ト國民トノ關係ヨリ生スル所ノ種々ノ權利ノヲニ付キ又「バビエール」及「ウイルトンベルグ」ノ國內ノ交際ニ付テ郵便及電信ノ賃銀規則ノ外賃銀及無賃ノ「」ニ付テ總テノ法律ハ帝國ノミニ屬ス○「バビエール」及「ウイルト

ンベルグ」ノ聯盟各邦ニ非サル隣國トノ交際ニ係ラサレハ郵便及電信ノ外國トノ交際ニ付テノ規則ハ又帝國ニ屬スヘシ「バビエール」及「ウイルトンベルグ」ノ聯盟各邦ニ非サル隣國トノ交際ハ昔時ノ如ク千八百六十七年十一月二十三日ノ郵便條約ノ第四十九條ニ循フヘシ○聯盟各邦ヨリ帝國ノ大藏省ニ納ヘキ郵便及電信ノ餘金ノ「」ニ付キ「バビエール」及「ウイルトンベルグ」ノ二箇國ハ之ニ關係セサルナリ

○米利堅

第一條第十三節第七 飛脚屋ヲ建テ其道路ヲ作ル事

第九 相續

○英吉利

卷一第二條 凡侯伯及自餘ノ大夫諸士死スルキニ其嗣子己ニ成人
シタル者古例ノ相續禮金ヲ出スキハ必ス遲滞ナク其家督ヲ相續
スヘシ則一侯伯毎ニ金百ポンド大夫ノ大ナル者ハ百シルリング
其餘小大夫諸士ハ各其大小ニ由リ必ス古來ノ慣習ノ如クナルヘ
シ

第三條 凡嗣子尙幼少ニシテ年ヲ歴成人ノ後ニ其家督ヲ相續スル
キハ別段相續禮金ヲ要セサルヘシ

第十 後見

○英吉利

卷一第四條 凡幼少ナル嗣子ノ後見人ハ其嗣子ノ領地ヨリハ必ス

條理ノアル利益運上諸稅等ノミチ所持シ決シテ其土地ニ屬シタ
ル人畜器械等ヲ損害スヘカラス若シ州官又其餘ノ人ニ其土地ノ
支配ヲ命シテ其土地ヲ荒シ又損害ヲ醸スキハ朕必ス其償金ヲ取
上ケ其土地ハ朕ニ對シ責任ヲ有スル土地預リ人ノ思慮アル者ニ
人ニ其支配役ヲ與フヘシ

第五條 凡後見人ハ其後見人タル間ハ必ス其土地ニ屬シタル屋舎
園圃兔園澤池其餘一切土地ヨリ出タル物ヲ保有シ而シテ其嗣子
成人ノ年必ス其全土地及鐵鋤馬車凡其土地ニ屬シタル入用ノ品
器并ニ其土地ヨリ生スル利益等一切之ヲ其嗣子ニ復還スヘシ

第十一 婚姻

○英吉利

卷一第六條 凡嗣子妻ヲ娶ルコ必ス損耗無カラシムヘシ故ニ其婚姻ハ必ス先ツ其親族ニ告ヘシ

第十二 孀婦

○英吉利

卷一第七條 凡孀婦ハ其夫死去後遲滞ナク其遺物并ニ再婚ノ權利ヲ有セシムヘシ或ハ再婚ノ權利又遺物ヲ受ン爲ニ禮金ヲ取ヘカラス又其婦ヲシテ故夫死去ノ後四十日ハ其家ニ居住シ其間ニ必ス故夫ノ遺物ヲ受ケシムヘシ

第八條 凡孀婦寡居セント欲スル者ハ其婚姻ヲ強成セン爲ニ或ハ其家産ヲ押留スヘカラス但其再婚セント欲スル者ハ必ス先ツ朕直臣ナラハ或ハ其君陪臣ナノ許可ヲ得ヘシ

第十三 財產

○英吉利

卷一第四十三條 凡除族上地ヲ領スル者死スレハ其嗣子相續禮金或ハ禮役ハ其舊主ニ勤タル舊例ノ外ハ決シテ之ヲ要セサルヘシ而シテ朕之ヲ保有スル規則ハ都テ其舊主「パロン」ノ如ナルヘシ○英ノ法律ニテ死後嗣子無キハ其土地家財悉ク之ヲ官ニ没ス之ヲ除族上地ト云之ヲ又餘人ニ領セシム

第十四 專賣

○米利堅

第一條第十三節第八 書籍及發明ニ暫ク專賣ノ權ヲ與ヘ作者並ニ

發明家ヲシテ利潤ヲ得セシメ大ニ文學技藝ヲ獎勵スル事

第十五 償債

○英吉利

卷一第九條 凡債仔ノ動産其債ヲ償却スルニ足ルキハ必ス其不動産又其租銀ヲ抑留スヘカラス又債仔尙其債ヲ償却スルコトヲ得ル間ハ必ス其保証人ノ家産ヲ押留スヘカラス若シ債仔財産已ニ竭盡シ其債ヲ償フ能ハサルキハ即チ其保証人其責ニ任スヘシ而シテ保証人ハ其債ヲ得ルマテハ債仔ノ不動産及其租銀ヲ押留スルコトヲ得ヘシ但保証人之ヲ願ハス及債仔已ニ免債ノ證ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第十條 凡「シユ」ニ負債ニテ死スル者其嗣子幼少ノ間ハ其嗣産ヲ

以テ其債ヲ償フニ及ハス若シ其債朕カ手ニ歸入スルキハ其債ノ證書ニ記入シタル動産ノ外ハ決シテ取ヘカラス

第十一條 凡「シユ」ニ負債ノ儘死スル者其孀婦ノ遺物ヲ以テ其債ヲ償フニ及ハス又子女アル者ハ必ス先ツ其養育料ヲ備ヘ且其領主君ヘノ禮金ヲ濟シ然後其有餘ヲ以テ其債ヲ償フヘシ

第十六 隄防

○英吉利

卷一第三十三條 凡「テイムス」河并ニ英國中將來ノ堤壩ハ破壊スヘシ但海岸ハ此限ニ在ラス○昔シ政府用度不資收斂ノ臣百方人民ヲ苦シメ河渠敷所ニ無益ノ堤壩ヲ築キ此ニ託シ通行スル者ヨリ稅ヲ收ム今此弊害ヲ改正セントス

第十七 各州

○米利堅

第一條第十五節一 何州ニテモ私ニ條約ヲ立テ盟約ヲ結ヒ或ハ聯合シ「マルクヒプリサ」ノ令狀ヲ與ヘ貨幣ヲ鑄紙幣ヲ造ルヲ得ス
國債ヲ拂フニハ必ス金銀ヲ用ユヘシ「ビルチフアツテ」ンダー及「エキスポスト」フハクトロー「或ハ金銀等貸借ノ約定ヲ壞ル如キ法
ヲ立又貴爵位號ヲ與フルヲ得ス

第四條第二節三 何州ニテモ其法度ニ從ヒ用テ爲シ役ヲ勤ル人若シ他州ニ遁ルニ其州ノ法度ニ由リ其用或ハ役ヨリ免ルヘカラス
必ス之ヲ其用役歸スル所ノ人ニ渡スヘシ

第三節一 新州此合州部中ニ入ルヲ許スト雖モ議院并ニ其州ノ議

政官之ヲ准スニ非レハ部中新ニ州ヲ建テ又一二ノ州相合シテ州ヲ成スヘカラス

第四節一 合衆部中各州ニ共和政治ヲ保タシメ而シテ各州ノ外寇ヲ防キ其州議政官ヨリ乞ハ、其内亂ヲ鎮ムヘシ但其官會セサル
モ其州ノ行政官ヨリ之ヲ乞フモ亦可ナリ

第十八 銀行

○瑞典

第七十二款 國立銀行ハ議院ノ管轄ニ保證スル所ニ屬シ而シテ兩局ニテ命スル所ノ委官アリテ議院條例ヲ守リテ支配シ決シテ他ヨリ之ヲ間然スルヲ許サス○銀行ノ金券ヲ發出シテ王國ノ貨幣トシテ通用セシムルハ獨リ議院ノ權利ニ限ルヘシ○右金券ハ

其量位ニ應シ銀行ニ於テ日限ヲ立テ或ハ金貨ニ引換ユヘシ

第十九 聯邦

○瑞士

第十三條 聯邦ハ常備兵ヲ置クノ權ヲ有セス○何レノ列邦若クハ各半邦ト雖モ聯邦政府ノ許允ヲ經スシテ三百以上常備兵ヲ置クヲ得ス但憲法ハ此員外ニ在リトス

第二十 列邦

○瑞士

第七條 凡列邦間ニ於テ各自ノ盟約及國事上ノ諸約ヲ結フコトハ之ヲ禁ス然レ列邦ハ互ニ立法施政司法ノコトニ關スル契約ヲ結ノ權

ヲ有ス但此等ノ契約ハ聯邦政官ニ申報スヘシ若シ其契約中聯邦ニ背キ又他ノ列邦ノ權利ヲ妨ル條アルキハ聯邦政官ニ於テ其執行ヲ停止スルヲ得ヘシ否ラサルキハ結約シタル列邦ヨリ之ヲ執行スルカ爲ニ聯邦ノ助力ヲ請フコトヲ得

第十一條 降伏ノ契約ヲ取結フコトヲ得ス

第十四條 列邦間ニ爭論ノ起ルニ際シ各邦ハ自ラ手ヲ下シ若クハ軍ヲ備フル等ノコトアルヘカラス必ス聯邦政府ノ其成法ニ依準シテ下ス所ノ裁決ヲ仰フヘシ

第十五條 外國ヨリ生スル急難ノ時機ニ際シテハ難ヲ蒙ラントスル列邦政府ハ他ノ列邦ノ應援ヲ請ヒ且ツ即時ニ危急ヲ聯邦政官ニ報知スヘシ但是カ爲ニ聯邦政官ヨリナス所ノ處分ヲ阻格スルコトヲ得ス又救ヲ求ラレタル列邦ハ必ス其請ニ應スヘシ而シテ此

等ノ費用ハ皆聯邦ヨリ辨償ス

第十六條 内國又他ノ列邦ヨリ起タル騷擾ニ際シテハ難チ蒙ラントスル列邦政府即時ニ急チ聯邦政會ニ報知シ其權限中ニ在ル須要ノ處分ヲ爲サシメ第九十條第三項又聯邦議會ヲ召集セシムヘシ又禍難極テ急ナルニ當テハ難ニ遇タル列邦政府即時ニ聯邦行政會ニ報知シテ直ニ他ノ列邦ノ應援ヲ求ルヲ得而シテ應援ヲ求ラレタル列邦ハ速ニ其請ニ應スヘシ又難ニ遇タル列邦應援ヲ請フヲ能ハサル狀アルキハ其求ナクモ當該ノ聯邦政官直ニ之ニ干預スルヲ得其騷擾全瑞士國ノ安寧ニ係ルキハ當該ノ聯邦政官必ス之ニ干預セサルヲ得ス○右干預スル時機ニ際シテハ聯邦政官宜ク第五條ニ定ル例規ニ遵フヤ否ニ注意スヘシ○右ノ費用ハ應援ヲ請フタル列邦又干預シタル列邦ヨリ辨償スヘシ但異常ノ

形狀アルニ因テ聯邦議會ノ特決アルキハ此限ニ在ラス

第十七條 前二條ニ掲ル時機ニ際シ列邦ハ兵隊通行ノ自由ヲ許ス

ヘシ但該兵隊ハ直ニ聯邦將官ノ旗下ニ屬ス

第五十一條 瑞士國內ニ於テ地方商貨稅甲邦ヨリ乙邦ヲ經過スル商貨ニ課スルノ稅ル商貨ニ課スルノ稅先ニ失ヒタル權廢ス聯合一邦ノ民ヨリ他邦ノ民ニ對スル回復權ヲ取戻スノ權モ亦之ヲ廢ス

第二十一 貴人會社

○伊太利

第七十八條 現在スル所ノ「イタリヤ」實牌等ヲ佩タル貴チ存續社則ニ由ニ非レハ其入額ヲ費用スルヲ得ス○國王ハ新ニ貴人ノ會社ヲ設ケ社則ヲ定ルノ權ヲ有ス

第二十二 一時施行

○英吉利

卷一第三十七條 凡「スキウテージ」「ハーゲーシ」農耕ノ土地ヲ有スル嗣子并ニ陪臣大夫等ノ嗣子等ノ後見株ハ朕之ヲ保有スヘカラス云々○「スキウテージ」「ハーゲーシ」等ハ皆昔土地ヲ領スル名ナリ而シテ今之アルコトナシ故ニ之ヲ略ス

第四十九條 凡内國臣民其二心無キヲ保證セン爲ニ差出シタル質子ハ悉ク其主ニ還付スヘシ

第五十條 「セラート」ノ親族ハ悉ク其縣廳ヲ退黜セシメ再ヒ之ヲシテ縣官タラシムヘカラス其餘「ジュネー」「ノエン」「シラード」「カンセル」「アソドリ」「ユー」「ピーター」及「シヨン」「マイトン」「セフレ」兄弟「ヒリツ

「フマール」兄弟「セフレン」及其姪并ニ彼等ノ臣隸等ハ悉ク之ヲ去ルヘシ○「セラード」以下數人ハ當時ノ權臣ナリ

第五十一條 凡國家安穩ニ歸シタレハ外國ヨリ雇タル兵卒ノ「弓隊」ハ悉ク之ヲ去ルヘシ○初メ侯伯ト爭論起リシヨリ外國ノ兵卒ヲ雇ヒ却テ内國人ヲ伐ツ國人益憤激ス

第五十三條 凡先王「ヘスリー」「二世」リツ「チャルド」一世ノ時ニ命シタル森林ヲ廢止スルコトモ前條ノ如ク十字軍ノ後ニ評定スヘシ且陪臣死後嗣子尙幼少ナル時土地預リ練是マテ朕ニ屬有シタル者并ニ諸侯ノ地ニ在ル寺庵保管ノ權利等ハ朕羈旅ヨリ復歸ノ日直ニ之ヲ調査シ其愁訴人ニ十分ノ審理ヲ付與スヘシ

第五十八條 「リウレー」ノ子及自餘「ウエルス」ノ質子并ニ其誓約證文ハ悉ク之ヲ還付スヘシ

2330
31

37948

千百五十二

第五十九條 朕スコットランド王アレキサンダート和ヲ講シ其ノ
姊妹質子并ニ自由ノ權利ヲ還付スルコト都テ他ノ侯伯ノ如クスヘ
シ但スコットランドノ先王「ダウリヤム」トノ契約ニ由リ他ノ侯伯
ト同轍ノ處置スル能ハサル箇條ハ此限ニ在ラス然レ此事ハ都テ
同列ノ評決ニ從フヘシ○餘慶遠ク「ウエルス、スコットランド」ニ及
フ當時諸侯ノ公平以テ看ルヘシ



第七	葉七行
第一	葉十一行
第二	葉十一行
第二	葉八行
第四	葉三行
第四	葉八行
第四	葉五行
第六	葉十一行
第七	葉十一行
第七	葉十一行
第八	葉十一行
第九	葉十一行
第一	葉十二行
第一	葉六行
第一	葉五行

正誤

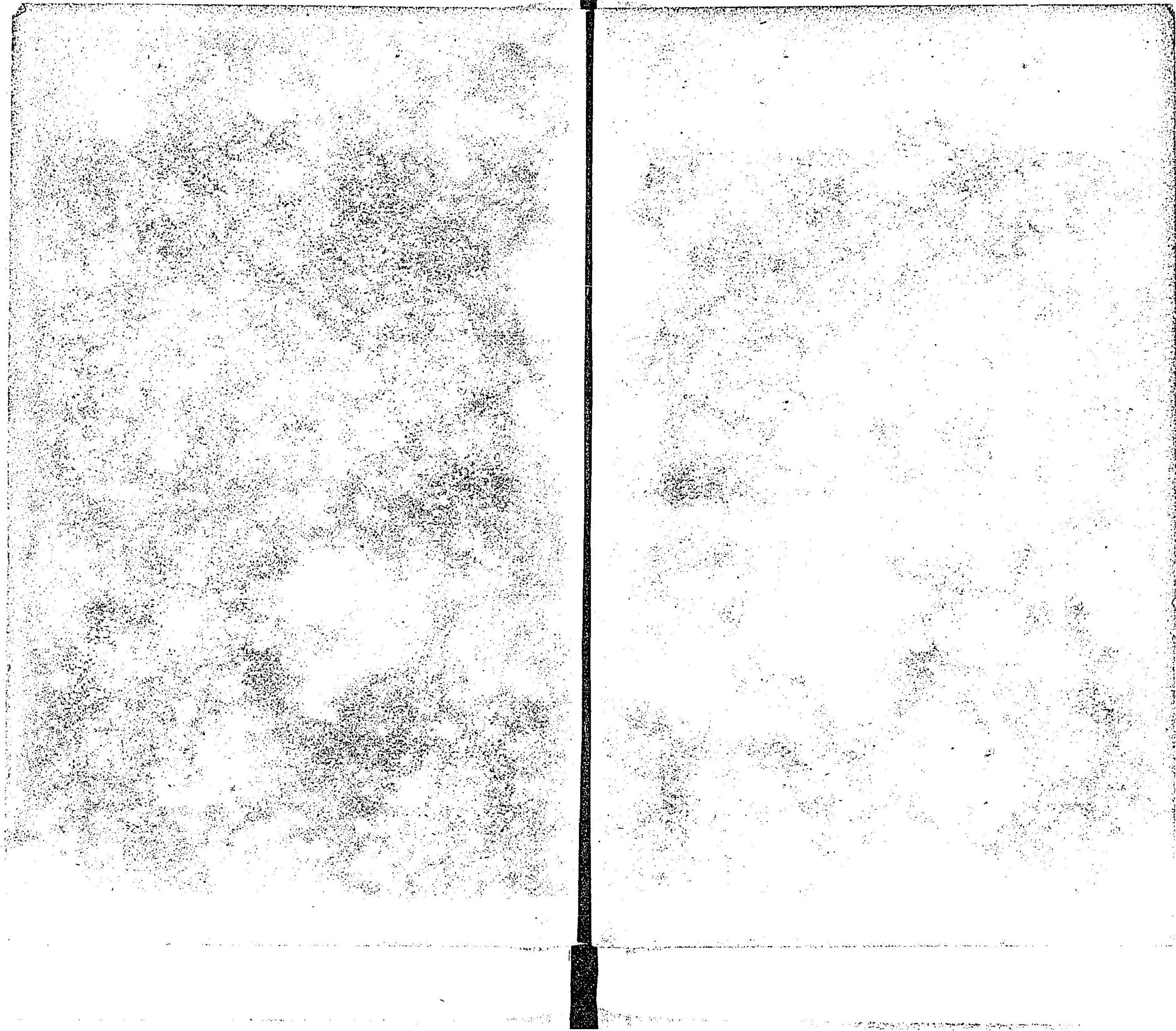
場合ハ場所
民選議員ハ議院
「數人ノ下名ハ衍」以スハ以テ
皇帝ノ上ノヲ脱ス
共和政治ノ下ヲ脱ス
元老院ニハ元老院ヲ
參議官ハ參議官
外冠ハ外冠
國有ハ固有
大成官ハ太政官
點陟ハ點陟
葡葡ハ葡葡
人嗣ハ入嗣
其ノ憲法ハ此ノ憲法
繼ノ嗣ハ繼嗣ノ

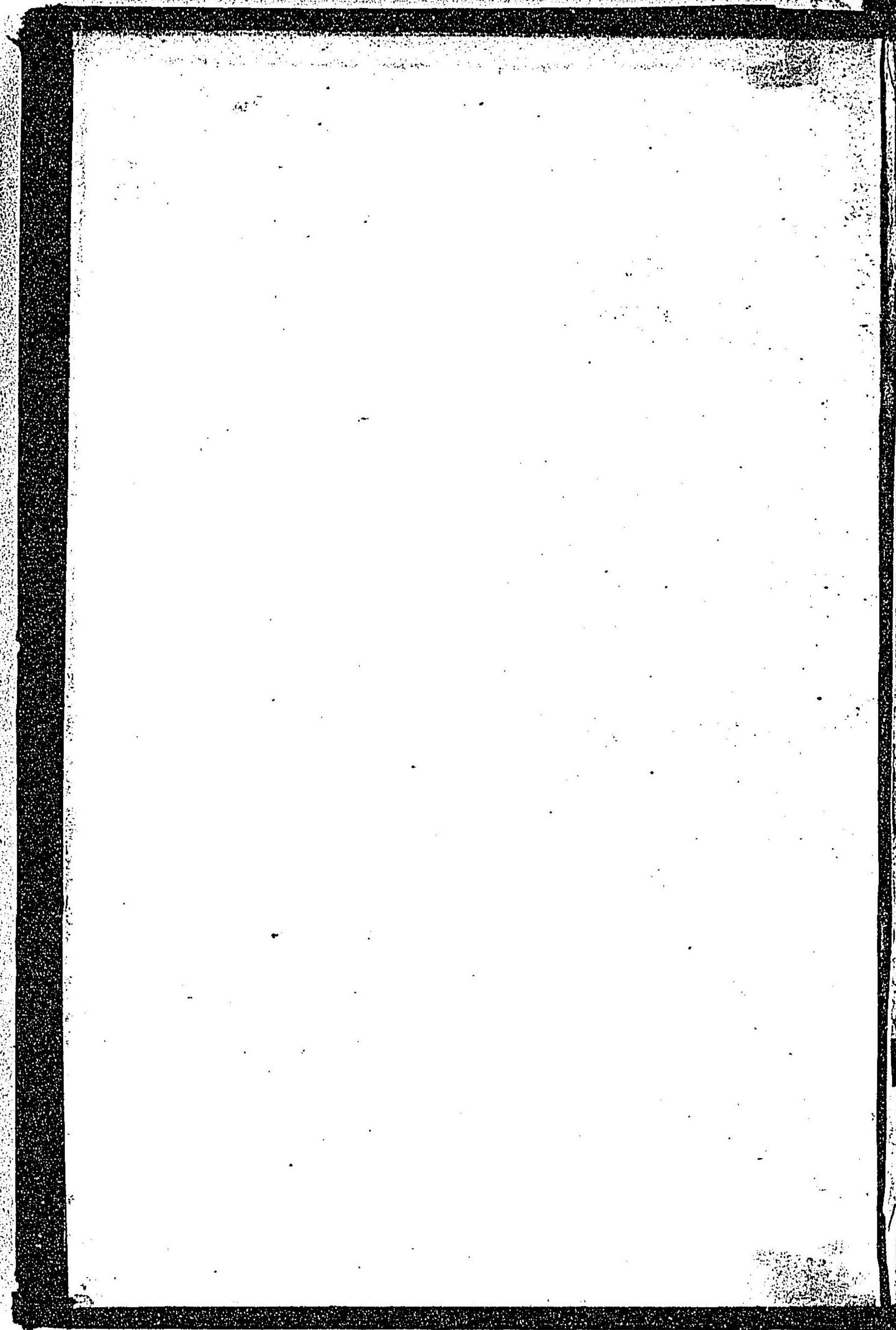
第一七六葉四行
 第一八二葉十二行
 第二〇六葉七行
 第二一九葉十二行註
 第二二六葉五行
 第二三二葉三行
 第二三三葉初行
 第二六七葉四行
 第二七三葉三行
 第二七四葉初行
 第二七七葉九行
 第二七九葉三行
 第二八四葉六行
 第二八六葉八行
 第二八九葉六行
 第二九五葉末行

帝威ハ帝位
 集會ヲ下待テ脱ス
 及ハ又
 ニ下居テ脱ス
 讓成ハ釀成
 賭賂ハ賄賂
 遷徒ハ遷徒
 和金ハ和合
 武ハハ武
 任セノ下ヲ脱ス
 其責ヲハコ
 畫ハ畫
 加辱ハ加辱
 委員ハ委任
 アリハナリ
 如何ノ下ナルヲ脱ス

第三四四葉末行
 第三五八葉九行
 第三六三葉八九行註
 第三七六葉末行
 第三八一葉二行
 第三九三葉三行
 第四二〇葉十一行
 第四三九葉十一行
 第四五五葉八行
 第五〇二葉三行
 第五〇三葉五行
 第五三三葉五行
 第五四七葉初行
 第五七二葉十行
 第五八九葉十行

學塾ハ學塾
 特權ノ上其ノノ二字ヲ脱ス
 教ノ下門ヲ脱ス「許ノ上ノ門英ノ下ノ
 ナハ術」
 刊邦ハ列邦
 「汚ノ上ヲ脱ス」タルハサル
 鞭撻ハ鞭撻
 撰業ハ選舉
 付ハ斥
 元ノ下老ヲ脱ス
 議院ハ議員
 上院ハ上院
 教育ハ教育
 務合ハ場合
 憲注ハ憲法
 サルハサレ







031460-000-8

C211-07

各国憲法類纂

久林館

M17

BBE-0059



